

(財) アジア学生文化協会創立 50 周年記念シンポジウム (第 2 回)
文京区制 60 周年記念事業

対話と協力 日本とアジア
アジアのヒューマンネットワークを問う 2007
～日本留学を帰国後どう活かしたか～

日時：2007年10月6日(土) 14：00～17：30

場所：文京シビックセンター 2F 小ホール

主催：(財) アジア学生文化協会

共催：区制 60 周年記念事業実行委員会・文京区・(財) 文京アカデミー

協賛：(財) 東芝国際交流財団・(財) 神林留学生奨学会・(財) 平和中島財団

記念シンポジウム プログラム

14：00	開会 挨拶 はじめに スピーカー紹介(10名) スピーチ前半(5名)	(財) 文京アカデミー理事長 宮下 眞 (財) アジア学生文化協会理事長 小木曾 友 石井 米雄
15：40	前半終了・休憩	
15：50	スピーチ後半(5名)	“日本留学を帰国後どう活かしたか”
17：30	閉会	

コーディネーター・スピーカーと報告テーマ

<司会：工藤正司 ((財) アジア学生文化協会 常務理事) >



コーディネーター
石井米雄 (Mr. Ishii Yoneo ; 日本)

 <スピーチ前半>

1. 日本帰りの病院長 20年の活動を振り返る

 ベー・チョウ・キム (Mr. Beh Chor Khim/Dr. ; マレーシア)
 


2. 韓国と日本のはざまの外交エピソード

 韓 英鳩 (Ms. Hahn Young Koo/Dr. ; 韓国)

3. フィリピンの伝統文化を発掘する

 E. アレグレ (Mr. E. Alegre ; フィリピン)
 


4. 『在日中国人大全』出版を通して見えてきたもの

 段 躍中 (Mr. Duan Yuezhong/Dr. ; 中国)

5. 現代の東游運動 ベトナム最大の日本語学校

 グエン・ドク・ホエ (Mr. Nguyen Duc Hoe ; ベトナム)
 

 <スピーチ後半>



6. 日本留学の医学博士 苦闘の40年

 アウン・チョウ (Mr. Aung Kyaw/Dr. ; ミャンマー)


7. 元技術研修生の進化 印日提携でIT企業誕生

 M.R. ランガナタン (Mr. M. R. Ranganathan ; インド)
 


8. 日本の固有(伝統)技術移転の壁

 ノリブン・ホラス (Mr. Noribun Horas ; インドネシア)

9. 奇跡の大学建設 泰日工業大学

 スボン・チャユツァハキット (Mr. Supong Chayutsahakij ; タイ)
 


10. 日本留学の功罪

ウォン・メン・コン (Mr. Wong Meng Quang ; シンガポール)

主催者よりご挨拶

工藤：ただいまより、文京区制60周年及び財団法人アジア学生文化協会創立50周年を記念しまして、両者共催によるシンポジウムを開会します。テーマは、「アジアと日本、対話と協力『アジアのヒューマンネットワークを問う2007』、副題として「日本留学を帰国後どう活かしたか」でございます。それでは、主催者よりご挨拶申し上げます。共催ですので両団体にお願ひしまして、初めに文京区を代表して文京アカデミー理事長、宮下真よりご挨拶申し上げます。

宮下：ただいま紹介戴きました、財団法人文京アカデミー理事長の宮下でございます。本日は『アジアのヒューマンネットワークを問う2007』に大変大勢の方にお集まり戴きまして誠にありがとうございます。この事業は区制60周年記念事業と銘打っておりまして、今年文京区が誕生して60周年目に当たります。それを記念しまして様々な事業を展開しておりますが、今日のこの事業もその一環でございます。またこの事業はアジア学生文化協会創立50周年記念事業でもございまして、こういう形で共催できますことは私どもにとりましても大変喜ばしい限りでございます。また、アジア学生文化協会様には日ごろから文京区の小中学校の生徒と留学生の交流会を実施していただくなど、小中学校の国際理解教育に大変ご尽力いただいております。心から感謝申し上げます。本日はアジアの各国から元留学生としておいでいただいた方々に帰国後、留学体験をどのように生かしたのか、また、ご自分のお国でどのような形で影響を与えられたのか、ということについてシンポジウムの形でいろいろお話をいただくこ



宮下真 文京アカデミー理事長

とになっております。皆様方にとりましても大変興味深い内容ではないかと思っておりますので、最後までご参加いただけるものと期待しているところでございます。どうぞよろしくお願ひいたします。はなはだ簡単ではございますが、開会の挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。

工藤：続きまして、財団法人アジア学生文化協会理事長小木曾友よりご挨拶申し上げます。

小木曾：私は財団法人アジア学生文化協会の理事長小木曾でございます。本日は土曜日にも関わらず、またお忙しい中、多数お集まりくださいましてありがとうございます。この催し物はアジア学生文化協会創立50周年記念ということでございますが、文京区制60周年の記念も兼ねて、文京区との共催ということでやらせていただくことになりました。会場の提供から広報、準備まで、何から何まで文京区にお世話になり、ありがとうございます。お世話になった皆様に心よりお礼申し上げます。

本日、10カ国10人の代表の皆様が「日本留学を帰国後どう活かしたか」というテーマで話をされますが、この10人の人たちは30年、40年前に本駒込のアジア文化会館に住んでい

たか、あるいは毎日のように会館に来られていた方々で、いわば全員の方がかつての文京区民だったと言えるわけですね。その方々が国に帰られて活躍されて、それぞれ立派なお仕事をされて、また戻ってきて今度話をされるということで、いわば里帰りの報告ということでございます。どうぞ皆様そういうことで楽しみにお聞き戴きたいと思っております。簡単でございますが一言ご挨拶を申し上げます。

工藤: ありがとうございます。それではさっそく始めさせていただきたいと思っております。最初にコーディネーターの石井米雄先生より、今日のシンポジウムのテーマ『アジアのヒューマンネットワークを問う』について、スピーチをいただきます。よろしくお願ひします。

コーディネーターのスピーチ

石井米雄 (Mr. Ishii Yoneo ; 日本)

人間文化研究機構長、文化功労者、京都大学名誉教授。外務省を経て京都大学東南アジア研究センター(現東南アジア研究所)教授、同所長など歴任

石井: ご紹介いただきました石井でございます。今日は文京区の記念行事の一環として、アジア学生文化協会の創立50周年のシンポジウムの司会をさせていただきます。司会をさせていただきます大変光栄でございます。実は私は、専門はタイでございまして、ちょうど50年前にタイの大学に留学をいたしました。そんな意味で今日の日本に留学された方の逆の経験をしたわけでございますので、その意味で今日のお話を大変楽しみにしているわけで



小木曾友 アジア学生文化協会理事長

すけども、今日のお話の基本的な姿勢はですね、日本で学んだこと、これは実は留学にとって人間、人脈、人間関係というのがいかに大事かということを私は前から感じておりまして、よく留学生の問題は留学生10万人計画だとか、最近だと留学生100万人計画なんていうのがあるんですが、私は実はあまり賛成できないんですね。10人でも100人でもそこに本当にヒューマンネットワークが出来たら意味があるんですけど、100万人の人が来て、ただ日本に来て帰っていかれるというのではほとんど意味は無いと私は思うんです。そういう形で10万人だ100万人だという議論はやめて、どうしたら留学生の人たちと我々日本人が心が通じ合えるかということにまず力点を置くべきだというふうに思います。

私自身ちょうど50年前、その時、私は28歳でしたけど、留学を生かしましてタイ人の家に下宿をしたんですね。よく私はなぜタイ語をやったんですかと言われるんですけど、結果的にですね、私がタイに行ってタイの人と付き合っているうちにこれでタイ語をやめたら非常に具合が悪いと、私の洗濯物を毎日洗ってくれたお手伝いさんが「なぜやめたの?」、私の下宿のおばさんが「なぜやめたの?」、というのに答えることが出来ないという状況のままに、振り返ってみたら50年経っていた



石井米雄氏

という感じですね。タイ語に「ニー ブン クン」という言葉があるんです。「ニー」というのは「借金する」という意味ですね。「ブン クン」というのは日本語で言ったら「恩」と考えたらいいでしょう、「恩義を感じている」と。私をタイの研究から離さなかった、今でもまだ続けて、私はあと何年生きるかわかりませんが、それは基本的にはですね、私を突き上げてその力は私がタイに「人間的な恩義」を感じているということですね。私はそれを非常に自分でも嬉しいことだと思っています。

私がタイ語を始めた頃には、日本ではタイ研究というのはほとんど無いに等しかった。もちろん言語の方はおられましたけど、タイの研究というのはほとんどなかったんですね。けれど、今や世界的なレベルの研究者がどんどん出てきている。私が、私自身が少しでもそういう一つのタイ研究というものを日本に作り上げて行くお手伝いができたんだとしたら、少しでも私に与えてくれたタイの人の「恩」

というものに応えられるんじゃないかと、そんなふうに思っているわけです。私が大変そうという意味で、私自身が留学した国との間の心の繋がりを感じておりますので、日本にいられた留学生の方々、今日はみんな日本にいられて長いことおられて博士号を取られた方がたくさんおられるわけですけど、そこまでがんばってやられた方が、いったい国へ帰られてからどういう形で日本に留学したという経験が生きているんだろうかということは、私自身にとっても大変興味があるという大変な言い方なんですけど、私自身も大変関心を持っているんですね。

このアジア学生文化協会のご案内の方は多いと思いますけど、穂積先生という大変偉い先生で、私も若い時に大変お世話になりましたけど、穂積先生の人間関係というものによって結ばれている稀な例と言っては、本当はこれが稀じゃいけないんですが、本当に稀な例では無いかと私は思います。そういう意味で穂積先生の伝統がすでに50周年を迎えるというので、小木曾理事長をはじめ、協会の方々がそれぞれ日本側において穂積先生の遺志を継いで、まさにアジアのヒューマンネットワークのコアになろうとしている。そういう形で今日同窓生が戻ってこられた訳ですね。さっき小木曾さんは文京区民とおっしゃってましたが、まさにそうだというふうに思いますね。文京区民という、区民税を払っているかどうかは知りませんが、とにかく文京区民としてこの文京区のシビックホールで話をされるというのはほとんど感慨無量だと思うし、もしもここに穂積先生がいらっしゃったら、こんなに喜ばれることは無いんじゃないかなと思っております。

そういう意味でぜひ日本留学を帰国後どういうふうに活かしたのかということにですね、



壇上に並んだスピーカーの面々

今日のお話の力点を置いていただきたいと
思いますので、どうかみなさまもそういうつ
もりでお聴き戴きたいとします。

私自身もタイの留学で困ったこともあつた
し、嫌なこともあつたかもしれない。けれど、
みんなそういうことを忘れてしまって、いい
思い出だけが残って行って、それが私を今タイ
に繋ぎ止めている訳です。みなさんもおそ
らく留学生として何年間か日本に暮らされい
ろんな経験を持っておられると思うんですね。
それがベースになってそれぞれの国にお帰り
になって日本で学んだこと、いったいなん
なんでしょうか。学んだということは単に研究と
か学問とかいうこと以外にですね、いろんな
ことを学ばれたと思います。プラスの面もマ
イナスの面も学ばれたと思うんですけど、そ
れがどういうふうに日本留学後ですね、帰国
された後で生かされたのかということに私自
身も興味を持っておりますので、今日の10人
の方々のお話を私も楽しみにして聞かせてい
ただきたいとします。

そういうことで今日のスピーチは、『アジ
アのヒューマンネットワーク』、これは実は
2回目なんですけども、この前の時（2006年
11月）はヒューマンネットワークが中心で

したけど、今日はその中でとりわけ
「日本留学を帰国後どう活かしたか」
というのにテーマを絞ってお話をい
ただきたいというふうに思っております。
どうか最後までごゆっくり聞
いていただければありがたいと思
います。

ありがとうございました。

工藤：先生どうもありがとうございました
ました。それでは次にスピーカーの
方々をご紹介しますと思います。ど

うぞ、壇上に並んでいただけますでしょうか。
順番にご紹介します。マレーシアのベ
ー・チョウ・キムさん。韓国の韓英鳩さん。
フィリピンのエディルベルト・アレグレさん。
中国の段躍中さん。ベトナムのグエン・ドク・ホエ
さん。シンガポールのウォン・メン・コン
さん。インドのランガナタンさん。ミャン
マーのアウン・チョウさん、インドネシ
アのノリブン・ホラスさん。そしてタイ
のスポン・チャユツァハキットさん
です。どうぞよろしくお願
いいたします。

通常シンポジウムといいますと、数人の方
でディスカッション形式を踏まえてやるん
ですけれど、今日のシンポジウムは、せ
っかくそれぞれの国からおいでになり
ましたので、10人全員の方にそれぞれ
のご体験を伺いたいと思
います。大勢でございますので、前
半と後半の2部制にしてござ
います。前半5名の方に、そ
して、10分間の休憩を挟んで
後半5名の方に伺うつもり
です。

それでは5名の方にお残り
いただいて、あとの5名の方
はどうぞ席にお戻りください。
あとをコーディネーターの石
井先生をお願いいたします。
どうぞよろしくお願
いいたします。



ベー・チョウ・キム氏

< 前半 >

①

日本帰りの病院長 20年の活動を振り返る

ベー・チョウ・キム

(Dr. Beh Chor Khim/Mr. ; マレーシア)

医師、医学博士 (東京医科歯科大学)

石井：それではさっそくスピーチを始めてください。

ベー：みなさんこんにちは。マレーシアから参りましたベーと申します。トップバッターですが、里帰りの報告をさせていただきます。私が日本に留学したのは30年前です。日本政府の奨学金をいただいて20歳の時に来日し、11年間おりました。その間の8年間は文京区にお世話になっています。

事務局から思いで話ばかりしないでくださいと言われていまして、日本から帰ってからの話をするよう言われているのですが、日本で何を学んだかみなさんに話しをしないとマレーシアに帰った時、何をしたかわからない

と思うので、スライドを使ってちょっと思い出の写真をみなさんに見せながら話を進めて行きたいと思います。1枚目お願いします。(写真①)これは来日した1977年に日本語を勉強したときですね。府中です。(②)大学に入ってからアジア文化会館(ABK)という千石にある寮に在館生として入り生活しました。

日本に留学する時、友達とか親戚に問われたのは、「なんで日本に行くんだ？

バカじゃないか。日本に行けば言葉も分からないし、1年間日本語を余計に勉強しなくちゃいけない。」というふうに言われました。また医学という分野を希望していたので、日本の医学部はすごく難しいんですね。(③)まあ医科歯科大に入りまして、日本全国から集まる一番頭いい生徒達と一緒に勉強しました。私は1人だけの留学生でした。そこで非常にいい友達がたくさんできました。(④)この人は、ドクター川上ですが、私と知りあって、マレーシアまで遊びに来て、それでアジアのことがすごく好きになり、彼は卒業してから国連に入って、ILOの仕事をしてアジアの人たちのお世話をしていますね。

卒業を前に、専門をどうすればいいかと、私が選んだのは心臓外科です。というのは、その時マレーシアには心臓外科があまりなくて、その技術を学んで帰りたいと思って。だけど、これも一番ハードな分野でした。日本の心臓外科のトレーニングはすごくハードですね。週に6日間当直して研究して家へ帰れない。自分の女房子供の顔も見れない生活をして、博士号を取って、マレーシアに帰りました。

マレーシアに帰って心臓外科を4年間やりました。一番最初に大きな問題に直面したのは免許の問題ですね。日本の大学の資格はマ



① 日本語学校時代



② 大学に入りABKに入館



③ 医科歯科大の仲間と



④ 友人の川上先生と



⑤ クリニックを開設



⑥ 文部大臣（当時）と



⑦ 新年会



⑧ 花金会



⑨ 日本文化体験

レーシアでは認められない。それが一番大きな問題でした。というわけで、仕事はさせてくれるけど給料はあまりくれない。専門医としても認められないで4年間働きました。月々の給料は4万円。だけど1日4例の開心術をやってきました。

1999年にマレーシアにある日本人会の会長に頼まれて、日本人のためのクリニックをやってくれないかということでクリニックを開設しました(⑤)。スタッフ2人で始めました。透析とか、診療をいたしました。

(⑥) この人はマレーシアの当時の文部大臣で、たまたま私の患者になりました。彼に直接留学生の問題を伝え、働き掛けましたら彼がすぐに内閣でこの問題を取りあげてくれ、さしあたって東京医科歯科大学だけは資格が

認められるようになりました。しかし、他のほとんどの日本の大学の資格はまだ残念ながら認められていません。これからの大きな課題だと思います。

次に、日本にいてどんなことを経験し、勉強したか、簡単に話します。(⑦) これはABKで毎年行う新年会ですね。いろいろな国の人たちと日本人たちも一緒に共同生活をして、食事したり、パーティーやったり、真剣な話もしました。(⑧) これはハナ金会というABKの留学生と職員の定期会合で、我々の時にその会を作りまして、毎週金曜日に食事をしながらアジアとか留学生の問題を話し合いました。(⑨) これは文化交流のいろいろな場面ですね。その他、日本の文化もいろいろ参加しながら体験しました。合宿とかもやって



⑩ 日本中をバイクで旅行



⑪ 新しいクリニックを開設



きました。悪いことも覚えました。カラオケとかビールの飲み方も。これも日本の文化です。⑩ また、日本のいろいろなところをバイクで旅行いたしました。ホームステイもいたしました。

働いて何年かたって、さきほどのクリニックが狭苦しくなってきた、今は、もう少し大きいところに移って、ドクター5名と職員40名のクリニックをやって、日本人のなんでも診ています(⑪)。子どもたちの風邪から大人の心臓病まで診ています。また、今は、クラアラルンプールの日本人学校の校医もやりますし、毎年JICA(国際協力機構)の人たちに医療の講演をしたり、あるいは日系企業の社長が作っているグループで三水会という会があり(毎月水曜日に会が開かれる)、そこに医療顧問として参加させていただいています。現在、私のクリニックのカルテ番号は78,000人くらいです。そのくらいの数の多くの日本人の患者さんを診てきました。もちろん、日本人のみなさんのマレーシア滞在期間は2~3年ですので、任期後帰国していると思います。そのうち私は定年したら北海道から沖縄まで元患者さんを訪ねながら旅行したいなと思っています。

以上です。簡単ですけども報告させてい

たきました。

石井：ありがとうございました。時間は非常によく守っていただいて、後の方のためにやっていたいただきました。大変興味のある話で、あとでまたコメントをさせていただきたいと思います。

②

韓国と日本のはざまの外交エピソード

韓 英鳩 (Ms. Hahn Young Koo/Dr.; 韓国)
中部大学理事、元韓国外交安保院教授、法学博士 (東京大学)

石井：それでは先に続きたいと思います。「韓国と日本の外交エピソード」ということで、韓さんにひとつよろしくお願ひします。

韓：アンニョンハシムニカ。こんにちは、私はハンと申します。私は日本に來ましてすぐアジア文化会館に入りました。それから学校は本郷にあります東京大学の法学部で外国人

研究生として始めました。そして、その次の年に大学院に入って、修士課程、博士課程を終わって韓国に帰ったわけですが、ご存知のように本郷も文京区で、アジア文化会館も文京区にありまして、私の行動半径はだいたい文京区だったといえます。前に石井先生がおっしゃっていましたが、住民税を払った覚えはありませんが、8年間くらい文京区民として生活したわけで、ここは私にとっても何よりのところだったと思います。

私は、ここ日本で勉強を終えて韓国に帰ったわけなんです、私の専門は国際法なんです。日本にいる時も私は韓国から来ましたと言いますと、みなさんが韓国について全て知っているだろうと思っっているような質問をなさってくださいませ。それが今度韓国に帰りましたら逆になりまして、私は日本についてなんでも知っているだろうと思われて、結局私の仕事も国際法の他に、日本の政治外交政策とか、韓国と日本の関係、日本と韓国では北韓、日本では北朝鮮といいますけれど、そういった韓半島での問題についてもちょっと仕事をやってきました。もちろん大学で講義もしましたが、もっと長く、日本でいう外務省に外交安保研究院いうところがあって、そこで教授として十何年間仕事をして、やはりいろんなところで日本との関係において仕事をやってきたことを報告できると思います。

そういうふうには仕事をしてきた中で、ここで何を話せばいいかと考えましたが、やはりここは日本ですし、私は韓国人ですから、韓国と日本の関係について三つほどの方面で話しをしたいと思います。

まず、最初は今一番問題になっている歴史問題になるわけです。1965年に国交正常化になりまして、その時、韓日基本関係条約を結んだわけなんです。その条約の第2条にな

りますが、ちょっとすごく専門的な話だと思っ方もいらっしゃると思いますが、私の専門が国際法でまた日韓関係のこともやりますから、それと関連してお話しますと、その第二条に「1910年8月22日及びそれ以前に、大韓帝国と大日本帝国との間に締結された全ての条約及び協定が、既に無効であることを宣言する」という規定があるんですね。これはどなたが見てもはっきりした内容を持つと思っれるんですが、その条約上とか外交上の言葉として“既に”という一言が入ることによって意味が変わってくるわけなんです。日本側では、“既に無効である”ということは、1948年8月15日に、韓国政府が樹立した時点で、既に無効になったから、その後は無効になるための手続きはやらなくてもいいんだという解釈をとっていますし、韓国側は、無効であるということに重点を置いて、無効だから無効になるための措置手続きをやらなければならないんだというふうに両方で若干対立した解釈をとっているわけで、それが今も後を引いていろいろな歴史問題を起こすと、そういうふうになるわけなんです。

二番目の問題は、韓半島と日本との関係についてお話ししたいんですが、また同じ韓日基本関係条約第三条に、「大韓民国政府が国際連合総会決議195号に明示されたように、韓半島における唯一の合法政府であるということを確認する」という規定があるわけなんです。それにもやはり日本政府は、“国際連合総会決議第195号に明示されたように”という条件を付けるんですけれども、それはやはり意味としては、北の地域における住民に対しては、大韓民国・韓国政府はやはり管轄権を持たないんだという解釈をとるためだったというわけなんです。

今は冷戦時代が終わったので、今日の新聞



韓 英鳩氏

にも載りましたが、ノムヒョン大統領が金正日さんに日本との関係を改善するようにアドバイスしたという記事を今朝の新聞で読んだんですけど、それほど時代は変わったわけなんです。その前の冷戦時代にはやはり韓国は韓半島全体における合法政府であるということを主張しなかったわけなんです。ですから、そういった意味では日本はどこかちょっと避けるところを作ったんじゃないかという不信感を持っていた時期もあったわけなんです。今は時代が変わって、そういう日本と北朝鮮との関係改善を望むところが多くなると、それほど発展したというふうに言えると思います。

三番目は韓国と日本との文化交流についてお話したいんです。両国間の文化交流もいざやらないといけない、そういう課題だったんですけど、この問題にだけは韓国側の反対によってずっと延ばされてきたわけなんです。その理由としては主に韓国側が、政治的、

経済的に日本より弱勢であるということと、やはり日本文化、特に大衆文化の波及効果をかなり警戒しまして、韓国に入ったら一方的になるのではないかと、そういう心配のもとで開放時期を延ばしてきたわけなんです。しかし、それもやはり1988年オリンピックが終わった後で、韓国も韓国文化に対する自信を持つようになるし、ただ塞ぐことだけが能では無いと、それよりもこの頃はインターネットとか衛星テレビとかそういうことで勝手に入ってくるので、開放を禁じることだけがいい方法では無いということもあったんでしょうね。

それで公開になったんですけど、でもみなさんもお存知のように、「韓流」、韓国語で「ハンリュウ」というんですけど、韓流によって事情は全て変わったわけなんです。ですから日本と韓国の間の文化交流は政府間の公式的な決定によって決まったんじゃなくて、やはり民間レベルの相互理解と、そういう期待感によって盛り上がってきたということが言えると思います。それと、日本では「韓流」という言葉がありますけれど、この頃韓国にも「日流」という言葉が出てきました。みなさまお存知ですか？「日流」。日本から日本文化が韓国に流れてくるということを意味するんですけど、韓国語では「イリュ」というんです。「日流」といいますと、今の韓国の若者は日本の音楽とか映画とかドラマ、または小説もかなり翻訳されているんです。今インターネットをつけてみると、日本語の新聞を読む時もヤフーのところを押すとすぐに韓国語に変っちゃうんです。ですから今は日本語を特に勉強しなくても、インターネットで全部日本の情報を見ることができるわけなんです。

ですから、これは日本だからダメとか、こ

これは韓国だからダメとか、そういうふうに言う時代はもう過ぎちゃっているんですね。ですから今は、もっといいものをもっと相手の心をとらえられるようなものを作ったほうが、国境を越えて本当の意味での交流になるのではないかと、この頃はそういうふうに思います。

ですからやはり、こういうふうに自発的、知性的な民間交流というのはもっと継続して、もっと深くなって、今までお互いの間に隔たりがあった、そういう問題を吹き飛ばすようなそういうお互いの緊密な交流になって欲しいとそう思います。日本で学んだ人としてそういうことを望んでいます。

そして最後に私も留学生の一人だったんですけど、やはり留学生は文化交流の最先端にあると思います。それは自発的に日本を知りたくて日本を訪ねてきた若者たちなんですね。ですから、そういう人たちは本当に私も含めてそうなんですけど、日本の文化を本当によく理解して国へ帰って、やはり日本のことをいいことにしろ、悪いことにしろ本当の姿を伝えようとする、そういう人たちなんですね。ですからこれからも皆様、温かく見守って下さい。どうもありがとうございます。

石井：ありがとうございます。どうも日韓関係というのを新聞で読んでみると、どこにも入り口があってどこにも出口があるんだかわからないで、時々絶望的な気持ちになるんですけど、今日のお話を聞いているとまさにこれこそですね、ハンさんが日本で国際法を勉強されて、客観的に日本と韓国の関係を十分理解された上で、しかし自分は今、何をしなきゃいけないかということで、本当に大事な役割を果たしてくださっているというふうに思います。今日その意味で、近ごろ日本では韓流

というのがあって、ヨン様というのが大変なことになっているのですが、日流で何かよくわかりませんけれど、そういう形ができたということで、今のお話を承ってやはり留学していただいてよかったなと感ずるわけです。

③

フィリピンの伝統文化を発掘する

E. アレグレ (Mr. E. Alegre ; フィリピン)

新聞コラムニスト、元フィリピン大学助教授、
京都大学大学院 (日本文学)

石井：それではお三人目にフィリピンのエディ・アレグレさん。よろしくお願いします。

アレグレ：私はアレグレと申します。フィリピン人で1961年から1972年、東京と京都で勉強しました。京都大学で国文学を専攻して学士と修士をもらって自分の国へ戻って、フィリピン国立大学で比較文学の分野で日本文学を教えることになりました。しかし、その4年後、大学をやめました。それで、フィリピンの一番南の島ミンダナオに行って5年間そこで住むことにしました。それでももちろん、お母さんも含めておまえはバカだなあと言われたんですね。そんなに苦勞していいポストももらったのに、なんで大学を止めたの。当時はミンダナオに何があるのかということもまだよく分らなかったし、説明することが難しかったので、いったいどんな答えをすればいいかわからないということだったんです。しかし私の考えでは、いくらいい文学を若者に教えても、一番いい大学でそれを教え

でも、ナショナルアイデンティティーがない限り、無駄であるんじゃないかと。そのとき、私にとって一番大きな問題は、いったいフィリピン人は何であるのか、どこから来たのか、ということでした。日本で、古い文学を勉強したので、18世紀の上田秋成を専門にして、5年間彼のことばかりを勉強して、フィリピンには古い歴史がないのでしょうか。それで京都ももちろんご存知のようにとても古いところですね。そのようなところはフィリピンには無いんです。そこで、フィリピンの古い歴史は何であるのでしょうか。

それで、1976年 Japan Foundation (国際交流基金) の Fellowship (研究奨学金) をもらって、また京都大学に戻って、その時には桑原武夫先生の紹介で人文科学の研究所に入ったんですね。それで和歌山県の紀伊長島の漁村に一年間住みました。なんで和歌山県を選んだのかというと、1930年くらいの話で、その海岸に古いこのくらいのものが浮かんできたと、漁村の若い人たちは知らないんですけど、年取った人たちは、「あ、それはココナッツ椰子じゃないか」と。ココナッツという木はその辺にはないんですね。日本には無いから、それがどこから来たかと、…フィリピンから来たんじゃないかという考えですね。そこに住んでいると、お盆になって、みんな自分の家をきれいにしてローソクに火をつけて、それで海の向こうから私たちの昔の先祖が来ると、お爺さんのお爺さんのお爺さんが帰ってくると。彼らを迎えるためにこのようなことをやってます。夜になると一緒に盆踊りを踊ります。特別の、その漁村だけの。

それで、彼らはどこから来るんですかと聞いたら、海の向こうから。海の向こうは、…フィリピンですね。そこで、その一年間いろんな経験もあって、もちろん古い都の京都に

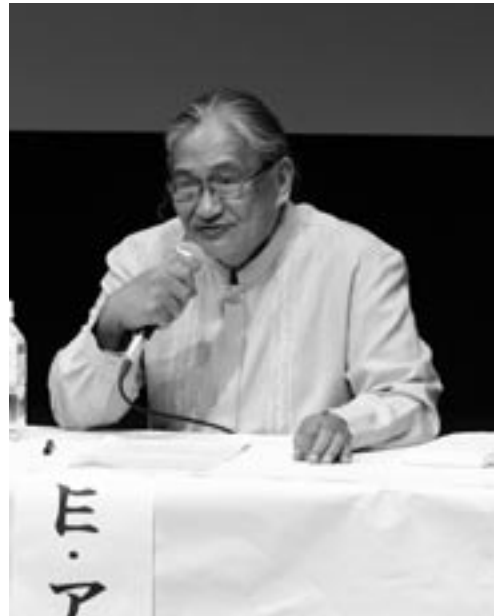
もたくさんの経験があって、自分の国に戻って、どうしてもその問題が残るんですね。つまり留学して、最後には自分のこと、自分の国が理解できるようになると思います。その理解ができなかったんですね。わからない、フィリピンのことは。だから大学を辞めました。そして、リュックサックを持って、ミンダナオへ5年間。そして歩いて、それでその結果ある程度フィリピンをわかることになりました。それはやはりその漁村、京都大学の影響、私に与えた影響ですね。その結果、14冊の本を書きました。で、年を取って14冊だけ書いただけでは少ないと思ってね、もっと出版しようと思うんだけど、そのうちに、そのうちにということですね。今はもちろんどこにも勤めてないですが、ビジネスワールドという新聞があって、そこに週1回フィリピン文化に関する記事を書いているんですね。それが今年は16年目です。

で、なぜフィリピンの本当の歴史は歴史の本で書かれなにかというと、フィリピンは約400年、植民地だったんです。最初は333年間、スペインの植民地だったんです。その次はアメリカの植民地になって、その後は日本の植民地になったというわけです。それはとても寂しい話ですけども、そのようなことは本当ですから否定することは出来ません。それで、歴史の本、つまり小学生から読む歴史の本では、なぜか私たちには古い歴史が全然ない。スペイン人が来る前には私たちの歴史は無い。それで、もちろん子どもたちはそれを受けて、それを信じるんですね。だから、ナショナルアイデンティティーが育たない。ナショナルアイデンティティーない限り、自分の国を愛することができない。ということなんです。

それから、もう一つの影響は、日本は文字

がある前に、つまり8世紀になる前にですね、中国の字を全部輸入して、それで万葉集もその文字（万葉仮名）で書いたんですね。万葉集は日本の文化ですから。もちろん、その後、ひらがな、カタカナができたんですけども。いずれにしても、日本の文化は無いことはなかったんですね。ずっとその前から続いてあります。生きています。だから、そこからヒントをもらって、フィリピンのことを考えると、私たちフィリピンの歴史は1521年から始まったということはウソですね。1521年にスペイン人のマゼランがフィリピンに来たんです。そうすると私たちもそれ以前、日本のように文字で書かれていない歴史を持っているんじゃないかと。それを探しにミンダナオまで行ったんですね。それで大学を辞めないと徹底的に研究ができない。お金はどこから来たかと言うと、お金はなかったので、バスターミナルで寝ることにしまして…、それはほとんどだったんです。

ところでミンダナオには100%のイスラム教、モハメッドですね、の信者の村がたくさんあります。昔のフィリピンはどこへ行ってもイスラム教の信者がいましたから。昔のフィリピンみたいです。とにかく、向こうに行ったら一番最初にするのはやっぱり部族長に会いに行くんですね。私はこのようなものです、お邪魔しますからお願いしますと。その次はイスラム教のモスクに行くんですね。すると彼らはとっとも私を温かく歓迎するんですね。そうするとアレグレさんどこに泊まるんですかと、泊まる場所は無いですよと言うと、それでは今晚ここで泊まってくださいと、とっとも温かく私を迎えてくれた。それが忘れられない。彼らのおかげで町から町へ、もうバスターミナルで寝ることはなくなったんですね。彼らは何も受け取らないから。



E. アレグレ氏

とにかく、なんで文化が無くなったか、書かれてないか、という他にも例があるんですね。スペインの植民地になった中南米、南米、またはアメリカの植民地になったアラスカとか、全部植民地になる前に、文化は無くなったんです。しかし、フィリピンには今でもあります。それをもっとはっきりさせるために、日本へ留学したことがとても役に立ちました。

最後に、日本に来てみなさんの税金で13年間勉強してきたんですが、日本を学びながら、日本の文化も日本の文学も、日本人も友達になって、最後には自分と自分の国をわかることになりました。ありがとうございました。

石井：ありがとうございました。日本に來られてまず日本文学を勉強された方が、さらにもういっぺん京都大学の人文科学研究所に來られて、そこで文字に書かれた文学とは違うものの存在というものに目覺められた。フィリピンはスペインが占領するまでは文化がな

いというか、要するにフィリピンの歴史というのはその前のことは何にも書いてないですね。そんなバカなことは無いということを日本で発見されたということだと思えます。これは大変な大きな日本からのおみやげで、それによって14冊も本を書かれたというのはつまりフィリピンにはスペインがフィリピンを占領する前にあった文化、それは文字に書かれていないけど口承の文学であると、最近、口承文学の研究、口承の研究というのが重要視されているんですけど、それを日本で学ばれたという意味で、まさにこれは日本留学を帰国後どう生かしたかということの典型的な素晴らしい例だと思えます。ありがとうございます。

④

『在日中国人大全』出版を通して見えてきたもの

段 躍中

(Mr.Duan Yuezhong /Dr. ; 中国)

日中交流研究所長、日本僑報社編集長、『現代中国人の日本留学』等著書多数。学術博士(新潟大学)

石井：4人目の方は入れ変りまして、魏さんにおいて戴くところを、体調を崩されたということで急遽変更になりましたので、ちょっとご紹介下さい。

工藤：事前にお配りしたパンフレットは、中国からは北京大学の魏(ウェイ)先生をお呼びすることになっておりましたが、直前に急病になられまして日本に来ることが出来なく

なりました。それで、急遽、段先生にお願いしました。その点皆さまご了承きたいと思えます。また、石井先生初め、各スピーカーの方のご経歴については、このチラシに書いてありますので、時間の制約上私の方からご紹介申し上げることは略させていただきますので、どうぞそちらをご覧になってください。よろしくお願ひします。

石井：ありがとうございます。それでは段さんよろしくお願ひします。

段：みなさんこんにちは。私は中国湖南省出身の段 躍中(ダン ヤクチュウ)と申します。本来ならば先ほど紹介されたように魏先生がここに座っていらっしゃるはずですが、急なご病気で来られなくなって、小木曾先生それから工藤先生からお話があり、皆様と縁ができて、ここで報告することが出来ました。とても嬉しいと思えます。私もこのスピーチを引き受けて真面目に原稿を用意したんですけど、さっきの3名の方の話をきいて、用意した原稿を棒読みすることはつまらないのではないかと思って、棒読みを止めて、いくつか感想なり自分が考えたことを申し上げたいと思えます。

まず一点目は文京区と中国との関わり、一言触れたいと思えます。みなさんちょっと頭の体操をしていただきたいのですが、日本で一番中国と関わりのある区、あるいは日本と中国の一番大きな交流センターはどこにあるのでしょうか。…ここ文京区ですね。というのはご存知の通り、すぐこの隣ですけども、後楽寮、日中友好会館がございます。日中友好会館は日本と中国の間の協力の拠点でそこに付属している後楽寮でもう20年以上、毎年200名以上の中国のエリート達が住んでい

ます。それから中国専門のホテル、後楽賓館も文京区にあります。日本の7つの友好団体の中に、日中協会、日中友好会館も文京区にあることをみなさんたぶんご存知だと思います。そして日中友好会館の付属施設である日中学院は50年以上の歴史があり、中国語を教えている日本随一の日中交流のセンターではないかと思います。

人物について申し上げますと、67年から今年までちょうど40年間、中国訪問が500回以上の人も文京区に勤務しています。これもびっくりすると思います。40年間500回。これはほんとうのことです。私は日本に来て16年になるものですが、あの方にはいつも中国のことを聞いて、日本のことを勉強させていただいています。

それから私個人と文京区の関わりを申し上げますと、娘は、今年の3月本郷小学校を卒業したばかりで、妻も文京区にある大学の修士課程を卒業しました。文京区は私たちの故郷でもあるし、大変ありがたい区です。いつも図書館を中心にいろいろな区立施設を利用させていただいております。この場をお借りして心より感謝申し上げます。

それでは本題に入りますけれど、今回与えられたテーマは『「在日中国人大全」出版を通して見えてきたもの』ということですが、まずこの「在日中国人大全」がどういったものかという、時間を節約するため私は朝日新聞の記事をコピーしてきました。今、皆さんの手元があればそれを参照いただきたいと思います。

簡単に申し上げますと、私の専門は中国人留学生の日本留学の歴史、特に改革開放以降に日本に来られた方々の現状調査といったテーマで、約10年前に「在日中国人大全」という本を出版しました。その本はちょっと重



段 躍中氏

くて今日は持ってこなかったのですが、なんと1,000頁、1.6キロもあって、1万人の情報と5万件のデータを載せました。朝日新聞・ひと欄をはじめ読売新聞の一面コラム「編集手帳」、それからNHKのBSの特集番組で放送され、一躍知られたようです。大変手前みそなことですが、みなさんにこの記事を確認していただければ、「在日中国人大全」がどういったものかはおわかりになると思います。

ちなみに、この「在日中国人大全」発刊式は、文京区にある日中友好会館で行いました。約10年たって、またここでみなさんに報告できるのは本当に幸せなことではないかな、縁ではないかなと思っています。

ではなぜ私がこのようなものを作ったかという、一番の目的は在日中国人の全体像を明らかにしたいということですね。私は91年に日本に来て、その時の日本の主なメディア、ほとんどの大手新聞や雑誌などで報道されていた在日中国人のイメージは、やはり犯罪な



どのマイナスの報道が圧倒的に多かったです。私も一応中国にいる時は中国青年報、若者向けの最も読まれている人気新聞の記者でしたので、日本語をまだ読めなかった時でも、漢字が多いですから、新聞の活字に目を通していました。

いつも社会面を開くと、在日中国人に関するマイナスの報道が多く、1人の在日中国人として恥ずかしい面もあるし、やはりもっと明るい情報を、中国人の活躍情報を日本社会に発信しなければならぬと思い、私は1人でこつこつ6年間がんばって、こういうデータを収集して1冊のデータブックを発行したということです。

もう一つ、中国人の活躍、中国人の日本語で書いた本、日本で博士号をとった人々の情報は、日本の国際化、日本の留学生政策の成果ではないかなと思うんですね。私の博士論文も文部省から180万円の研究成果公開助成金をいただいて出版しました。ここにいるみなさんの税金も含まれていると思います。

これに感謝して、この「在日中国人大全」を作ったのが2番目の目的。こうした国際化の成果を世界に発信しなければならないと思います。もちろん留学生受入れ政策とかいろいろな問題点もあるんですけど、ただそれは成果を知らないうちに問題点を指摘するのはどうかなあと、考えています。

それから3番目の目的という今日テーマであるヒューマンネットワーク形成に役に立ちたいということですね。2300名の博士号をとった中国人の情報、日本の各大学で教えている先生方の情報、専攻、そういったことが1冊になったのは初めてですから、いろいろな方々に活用されて日中交流に役立ったらいいなあということです。

ただ残念ながら、その本が出版されて、いろいろな使い方で使われていますけど、商売やDMに使われたこともあります。もちろんこのような本を1人の留学生が作り、発行したことは、本当に日本のおかげですし、みなさんのおかげではないかと思っています。

次に、留学した後中国に帰った人々の活躍、これも一つのメインの内容としてみなさんに報告したいと思います。ご存知だと思いますけど在日華僑華人は今現在、すでに70万人を超えております。そのうち日本で外国人登録している人は56万人越えました。それから日本国籍を取得した人は、10万人を突破したんですね。あとの3~4万人は不法滞在の人です。こんなに大勢の中国人が日本に來まして、じゃあどのくらい帰ったのかということ、今のところは、主に中国国費の留学生が帰っております。だいたい4~5万人くらいと言われております。こういった人々は、日本留学を終えて、中国へ帰って、どういった分野で活躍されているかという追跡調査を、私は数年間ずっとしておりましたので、いくつかデータを申し上げます。中国の政府機関、各省庁の大臣クラス、副大臣クラスの人になった中国人留学生は、少なくとも5名は確認できました。つい今年亡くなった1人の政治局常務委員で党のナンバー5の黄菊氏は、日本で研修された経験があります。私が主に申し上げたいのは留学経験を持つ人々ですが…。それ

から局長クラスで元留学生は、数十人、少なくとも40人から50人はいるのではないかと思います。それから課長クラス、これは中国政府機関の課長クラスですね、課長クラスは特に政策、対日政策設定には大変力を持っている方々で、これは数百人になります。それから大学の研究者、教授、政府機関の研究部門で活躍している方々は数百人ということです。31の省、市、自治区、多くの大学の中で日本留学経験者は活躍しております。

ここで一つの例を申し上げます。工藤先生の友人でもあり、私もよく知っております西安交通大学学長の鄭南寧先生、50代後半の人です。それからつい9月に就任されたばかりの海南大学学長の李建保先生も日本留学組で、留日組においては大変有望株ですね。李建保氏は私よりも若く、一つ下ですが、将来は間違いなく中央委員クラスに入るとい方です。とても期待できる方です。

それから留学生の組織、実は、中国では民間団体は基本的にありません。全て政府の承認が必要です。そのため留日学生達の交流組織、「北京留日学人活動站」（留日学人活動ステーション）は、中国にある日本大使館の承認は得ていますが、中国政府から正式な認可はされていないようです。

今年、在中国日本大使館の宮本雄二大使が初めて主催した「桜を見る会」には、全国の18の有力な留学生団体のリーダーが招待され、北京の大使公邸で開催されました。私も急遽呼ばれて皆さんに合流しましたが、確かに全国レベルの組織、まだそういったネットワークは形成されていない。これからは、それは一つの重要なテーマとして、帰った人々のネットワークを作り、交流を深めて行くことは、必要ではないかと思います。

時間の関係で、最後の問題は、一点だけ。

今日はみなさんに私が発行している「日本僑報」という小雑誌を配りましたが、これは主に在日中国人に関する情報、それから日中関係書物の紹介です。これは私個人がこの10年間いろいろな方々の支援を得てがんばったものです。この10年間に合わせて160冊以上の本を発行しました。この中で、一つだけ説明したいのは、8ページに載せてある、中国人留学生の宿舎「後楽寮」の寮生達の記録集を今編集しております。ここも文京区との関わりは大きいですね。ちなみにこの寮を出た人々の名簿は、今のところ無いということです。やはり留学された方々は、日本の宝物でもあるし、中国の宝物でもあるわけですから、帰った人々に対してももっと応援して欲しいなということで、私もこの場を借りてみなさんに応援をお願いしたいということです。

内容が多すぎて十分に伝えられなくて少し残念ですけど、時間がきてしまいました。申し訳ございません。この辺りで終わらせていただきます。ありがとうございました。

石井：今、段さんがおっしゃったことは実は非常に重要なことでありまして、日本人が一番得意じゃないのは歴史なんですね。日本人は、歴史は非常に好きで司馬遼太郎とか塩野七生さんの本がベストセラーになるんですが、歴史感覚というものが日本人には無いんですね。昨日までのことは全て水に流してとって、新しくやるわけですね。ちょうど徳川が終わって明治維新になるとまったく別の世界になるわけですね。そういう意味で日本は徳川と明治維新、それから終戦の1945年にそのことを経験した。私はたまたまその時は旧制中学の3年生でしたけど、昨日までは鬼畜米兵と呼ばれていたわけですが、進駐軍が入ってくるとこれはもう民主主義の砦だというこ

とで、がらっと変わるわけです。私は一生懸命教科書に墨を塗った世代なんですけど、それは何かというと、歴史感覚がないということなんです。その間何が現れているかということ、過去の記録というものをあまり重要視しない。私は驚いたんですけど、ある日本の国際交流団体ですね、ものすごくお金を使ってもらえるのに、今まで招かれた人のリストはありますかといったら、無いんですよ。それでワーワーって、結果的には20年以上に世界中から招いた人のリストがやっとできたら、出来てみるとこんな便利なものはない。そういうことがほとんどされないのが現状なんです。ですからその意味で記録を作るということは非常に大事なんですけど、日本人は記録を作るのは非常に嫌いなんです。古いものは役に立たないと、みんな棄ててしまうんです。

その意味でダンさんがまさにその部分を日本と中国との関係において記録をつくっておられるということは、日本人はあまり評価しないかもしれないけど、私は本当にこれが大事なことで、日本ももっと記録のことを大事にしないといけない。最近社会保険庁で5,000何人がどうかこうとか言ってますが、全部記録の問題ですね。記録をやはりしなければ、記録は昔から続いているわけで、それを切って棄てるわけにはいかないわけですね。歴史というのは昨日の次は今日で今日の次は明日なんです。ところが日本人は昨日までのことは全くない。今日から新しく出発しようと。それが日本人のいいところでもあり、悪いところでもあって、今、悪い面が非常に出てきているわけですね。その意味でダンさんが日本に学ばれて、日本の欠点をちゃんとご存知になってこういうものをやっておられるということ、私は大変高く評価したいと思います。

ありがとうございました。

段：少し、30秒、お願いします。一つデータを忘れましたが、97年時点では2,300人の博士号習得者が確認できましたけども、10年後の今はもう中国人の博士号取得者は6,000人を超えました。みなさんにこのデータを申し上げたい。ちなみにどこの部署にもこの6,000人の博士名簿はないです。私たちは、今作っています。ありがとうございます。

⑤

現代の東洋運動 ベトナム最大の日本語学校

グエン・ドク・ホエ

(Mr. Nguyen Duc Hoe; ベトナム)

ドンズー (Dong Du) 日本語学校校長 (創設者, 1991年開校)、日本留学時在日ベトナム留学生のための学寮「東遊学舎」を設立主宰。京都大学・東京大学大学院修了 (理論物理)

石井：それでは前半の最後にベトナムのグエン・ドク・ホエさんをお願いします。

ホエ：ベトナムから来たホエと申します。まず簡単に私の経歴から紹介させていただきます。この中で私が一番、石井さんを除いて留学生の中で一番年取ってます。それから一番先に日本に留学したと思います。留学した年は1959年。そして一番長く日本に残ったと思います。15年近くいました。まず、大阪外国語大学で1年間日本語を勉強した後、京都大学に入ったんです。私の専門は物理学です。

特に原子物理学を専攻しようと思ったんです。京都大学を出て、幸い東大の大学院に合格した。合格したから本郷の正門前の新星学寮と縁ができて、今日ここで発言することが出来る、大変良かったです。

日本に来る目的は「先生になろう、学者になろう」という考えであります。昨日もちょっとお話した通り、穂積先生をはじめ新星学寮との出会いで人生が狂ってしまったんです。しかし人生が狂って良かったです。大学院で勉強をしながら7年間東京外国語大学で講師を務めました。それから日本で留学生を、世話しました。特に私費留学生を世話する人がいなかったから、私はそういう学生達を集めて、国際学友会の教室を借りて、塾を開いた。学生は、日本語学校に行きながら勉強していますが、先生の説明の内容が理解できない学生が多かったので、私は昼間は学校に行きますけど、5時から9時までそういう学生達に日本語の復習、それから数学、物理、化学などの分野まで学生のために受験勉強をさせた。それから学生を一人一人連れて、各地を回って各大学にお願いしたんです。

その後、その学生達から、「ぜひホエさんと一緒に住みたい」という話があり、それがきっかけで、私、新星学寮の友達、特に穂積先生の励ましで、北区の西ヶ原にベトナム人学生のための寮(東遊学舎)を作ったんです。それはもうボロボロな家、お化けが出るくらいのボロな家。もう、人が5年、10年使っていないところだった。全部ペンキを塗って、電気を配線して水道も配管して作り直したんです。設備は何も無い。街角で拾ったテレビ、冷蔵庫、それから茶わんや鍋は全部違ったものを近所の方が持ってきてくれたんです。茶わん、お箸、全部違ったものを。そういう生活をしながら寮を運営していたんです。その後、新宿の元



グエン・ドク・ホエ氏

国会議員会館だったところに部屋を借りて東遊学舎を持ってきた。

それから高田馬場の近くに寮をもう一つ作ったんです。多い時は40人の学生、男女の学生を指導した。教えながら学生の生活の面倒も指導してあげていた。それから日本から去る前、1973年7月、日本の友人の方々といっしょに、ベトナムの戦災にあった子どもたち、親のない子どもたち、不幸な子どもたちのために兄弟奨学会を設立しました。現在はABKが窓口になっている子供基金の前身です。

私が帰国したのは1974年1月。だから最初の仕事はやっぱり南政府の仕事を担当したんです。どういう仕事をやってきたかといいますと、ベトナムの経済復興計画を私が担当した。それは私の夢、15年間日本で勉強した私の唯一の夢はベトナムの国を工業化すること。その15年間ずっと考え続けたこと。どうすれば工業化できるかと。資本金はどこから、技術はどこから、人材はどういうふうにするか

と。そういうことを考えながら勉強してたんです。だからやはり帰った後すぐ使ってくれることは大変ありがたいし、うれしかったです。残念ながら私の性格のせいもありますが、やはり穂積先生の影響で、自分には信念があって、その信念に納得いかないことは、私は絶対やらない。最後まで戦う。それで、南政府の仕事はわずか2か月しかできなかったんです。その2カ月間は南政府内に嵐を起こした。政府の高官達、それから同僚達とケンカした。どういうことでケンカしたかという、私の経済の考え方はやはり日本の社会から学んだものです。だから経済を立て直して行くには中小企業の見直しから始めなければならない。それから、外国人の手ではなく、ベトナム人の手でスタートしなければならない。その2点。それからベトナムの人たちがベトナムの独立を達成し、その民族の平等を守ったことはやはり次の世代、私たちの世代に残してもらおうと。そういうことがあったから私には義務がある。だからそういう考えで、経済の再建計画は全部その信念に沿ってやったんです。残念ながらその当時の人々、特にアメリカで勉強した学者達、高官達と意見がぶつかって、とうとう仕事ができなくなって、私が辞職して大学に入ったんです。

大学に入って、工学部を自分でつくったんです。それはゼロ、1円も無かったところで、私は3か月で設立することができた。設備もちゃんとできた。それは1974年10月のこと。その翌月の11月、AOTSの同窓会のことがあったから、私はまた東京に行ってその大学を日本の各界に紹介して、日本の友人達にご協力をお願いしたんです。しかし大学に帰ったらまた問題が起こった。私がいけない間に、クーデターが起こった。私が転覆させられるほどではないですけど、それまでは私は一生懸命

大学を作ろうとベトナムのことしか考えていなかった。自分のことは考えなかった。仲間も自分の周りに固めていかなかったんです。だからそういう隙もあったから、私がいけない間にクーデターが起こったんです。

バンハイン大学へ帰ると、こういう噂を流された。「ホエさんはゼロからスタートしたから、これからバンハインの名前を消してグエン・ドク・ホエ大学にするだろう」と。そういう噂があちこち飛んでしまったんですね。みんなに疑いを持たれてしょうがないから私は大学を辞めた。それでも私の人生にはまたいいことが起こったんです。政府高官を辞めて、大学を辞めて、それで私はホーチミン市のサイゴンの街が陥落した時は全然責任を問われなかった。ですからその戦争の犯罪者として収容されなかったし、洗脳教育も受けなかったのです。それで、解放された私の人生はまた大学へ行こうと思ったのですが、しかし、先生達は1ヶ月間教育を受け直さなければならない、やはり私は1ヶ月も耐えられない。そこで、考えたんです。「もう教育界はやれない、私が学生にあげられるのは心だけ。心を、忠実に学生に伝えられなかったら意味がない。」それで思い切って、私は大学の仕事を辞めて、工業会に入ったんです。

最初会社の工務部長、工場長、それから独立し、機械設計製造までやった。それから今の共産党政権が私のことを聞いて、「ぜびホエさん、ベトナムの経済の復興の話をしてくれないか」と。それで今ベトナムに関係ある方はよくご存知ですが、ベトナムの輸出加工区、工業団地は私がおその案を書いたんです。

私は全国を回って宣伝した。それから、ハノイまでの各省の専門家達を集めて説明したんです。しかし残念ながら今、誰も私のことを覚えてないです。それも私の性格のせい。

やっぱりうまくいかない。正直、馬鹿正直。それから誰も恐れないで、最後まで戦った。それで、今の政権とまたうまくいかなかった。しょうがないから、もう一度教育界に帰った。そして、今の日本語学校を作った。それから留学生の事業を始めた。その他にも、ここにいらっしゃる多くの方々にも参加していただいた子供基金も始めた。不幸な子どもたちのための支援で、奨学金を与えてもらったり、また学校を作ってもらったり、そういうことをやってきたんです。

そういう仕事をやったことは、私は自慢しています。今、自慢できることは日本に留学して得たこと。それについて、簡単にご紹介させていただきます。それは私がたくさん勉強できたこと。一つは穂積先生に出会ったこと。先生の生活、先生の姿はいつでも私の頭の中に浮かんでいる。それは「人間は生きる限り信念を持たなければならない、信念のために生きなければならない、どんな困難があっても信念がなくなったらおしまいだ」と。それは先生から教えてもらったんです。

それから新星学寮、ABKの環境の中で育ったから国際親善はどういうものか。やはり穂積先生の心の広さがわかった。それからもう一つ挙げたいことは日本の経済、日本の社会の構造なりができて上がった姿を私が理解できたこと。それは本当によかったです。先輩もたくさんいる。後輩もたくさんいます。しかし学問だけ、本業だけでは日本を理解することは足りない。私は日本の社会に出てから、日本の会社で働いた。それで初めて日本が理解できたんです。ですから今後、留学生の皆さんもぜひ裏の街に行って中小企業から学んで欲しい。そうでなければ日本の姿がわかりません。そうでないと博士号を持っていても、その資格はありません。たくさん言いたいこ



とがあるのですが、時間がきたので。この辺で終わります。どうも失礼しました。

石井：お話を承って、日本とアジアとの関係というのは外交関係はもちろんあります。それから長い長い歴史の経済の関係があるわけですね。日本と東南アジアとの関係というのは600年以上前から日本から船が、鎖国の時でも船が来てたわけですね。だけど人間の交流というのはほとんどなかった。で、今でもその可能性は高いわけですね。大企業が出て行って組織でいろんなことをやってはいますが、今のホエさんのお話で、中小企業でこそ本当に人間を通じての技術の移転も出来るものの考え方がそこから学べるんだという、そういうことが非常に大事なんですね。今日お話を承って、やっぱり穂積先生がこれだけの方々に影響を与えたということは、やはりその意味でもアジア学生文化協会が50年経ったということの意味がしっかり出てくると思うので、この後は小木曾理事長にがんばっていただいて、あと100年間ぜひ理事長をやっていただかなきゃいけないと思います。今日来る前に一番心配したのはみなさんが1人、5分づつ余計に喋ったら、足したら10人になるからこりゃ大変だというので、チンと鳴らすことを用意してたんですが、さっきから全然鳴ってないわけですね。みなさん実によ



工藤正司 アジア学生文化
協会常務理事

意味で前半をこれで止めたいと思います。ありがとうございました。

工藤：皆さまありがとうございました。途中で、低い音で鳴っているベルの音は、「あと3分ですよ」という時間制限の予告なんです。それです。「それで終り」ということではありませんのでご理解をお願いします。それでは、只今より10分間の休憩をさせていただきます。大変ありがたいことに予定よりちょっと早めに推移していますので、再会は、40分ですね。40分までお越してください。それからちょっとのお知らせですが、先程来、穂積先生、あるいは新星学寮とかアジア文化会館ということがたびたび出ていますが、今日、その穂積先生に関する伝記の本が、今年の夏やっ出版できたんですが、できたてのほやほやがありますので、どうぞご関心のある方はお買い求めいただきたいと思います。また、日本人と留学生・研修生の人間的交流を書いた『私の忘れえぬ人』という文集が出来ておりますので、これもアジア文化会館へのカンパということでお買い求めいただければありがたいことと思います。それでは、あと10分でお集まりください。

く時間を守っていただいたおかげで順調に進んでおります。で、最後に時間があつたらぜひみなさんからいろいろなご質問をいただければと思うんですけど、そういう

< 後半 >

⑥

日本留学の医学博士 苦闘の40年

アウン・チョウ

(Mr. Aung Kyaw/Dr. ; ミャンマー)

ミャンマー日本留学生協会会長、ミャンマー学士院(医学)執行委員会共同事務長、元ミャンマー医科大学教授。医学博士(東京大学)

工藤：それではスピーカーのみなさんもお揃いのおようですので、後半の部をはじめさせていただきます。石井先生よろしく願いいたします。

石井：それでは前半に引き続きましてスピーチの後半を始めたいと思います。最初にミャンマーからおいでのアウンチョウ博士、よろしく願いします。

アウンチョウ：みなさんこんにちは。私、ミャンマーから出てきましたアウンチョウと申します。どういうふうに出てきたんですか？今ミャンマーはガタガタしてるのに、ということをよく聞かれましたけど、アジア学生文化協会、アジア文化会館の50周年式典にはなんとかして来たい、出席したいという非常に強い希望で日本に参りました。私も40年前、文京区に住みましたから、文京区は私にとって非常に懐かしい区であります。それで、日本はどこに住みましたかと聞かれると、文京区に住みました、東京大学で勉強しました、と誰にでも答えます。アジア学生文化協会に第一期生として入って6年以上住みました。その当時、穂積先生が初めて留学生会館の設備

を作ったわけでございます。まだ日本国としてもその時は駒場留学生会館一つしかありませんでした。今は皆さまもご承知のように日本中どこに行っても留学生会館があります。どんな遠いところでも留学生会館がありまして、安く泊まる事が出来る、安く勉強することが出来ます。当時の駒場留学生会館の部屋は3畳半でした。穂積先生が、一人6畳の部屋、本当に当時非常に立派な、屋上から富士山が見える、アジア文化会館をつくって下さいました。今はもう残念ながら見えないですけど。そこに私たちが1960年に入りました。

私は、1959年に東京大学に大学院生として入りました。ミャンマーでは医学部を出てきましたが、まだまだ若い医者でしたから、第一外科に入って、いろんな勉強を始めました。当時、もう40年以上も前になりますが、日本は世界でも先端装置が非常に進んでいる国でした。どこ行っても日本の機械、東芝とか日立とか、そういう機械が見られ、私は東京大学で先端装置の研究をしました。この装置はもともとスウェーデンで開発されたものですが、当時はもう日本のメーカーの良いものが出回っていました。それは電車の線路にひびが入っているかどうかなどを調べる超音波のAスキャンといいます、そのAスキャンを使いながら、脳の中が出血しているかどうか、脳内に血腫があるかどうか、脳の真ん中が圧迫されているか、そういう研究を私はしたんです。

当時の指導教授は清水健太郎先生という方で、非常に厳しい明治時代の方であります。その先生の厳しさが私には本当に良かったと、今考えてみるとわかります。今、先生にもう一度お礼を言いたいですけれど、向こうの世界に行ってしまうれました。私も間もなく向



アウン・チョウ氏

こうの世界に行きますから、その時もう一度お礼を申し上げたいと思っています。

二番目の私の先生は穂積五一先生でございます。アジア文化会館に入って先生からいろんなことを学びました。今、理事長でいらっしゃる小木曾友さんがその当時はまだ学生で、彼は農学部、私は医学部ですけど、彼は、初めてアジア文化会館で6,000円の安い月給で働きました。それから工藤さんとか、優秀な人たちが沢山アジア文化会館に入りました。

また、穂積先生は1959年に海外技術者研修協会(AOTS)いうのを作ったんです。それは会社の技術研修生を受け入れる団体で、ABKで留学生と一緒に生活しましたので、自治会の活動などを通じて研修生にも友達がたくさんできました。

先端装置を使って脳の中に何かあるかというのを初めて日本で勉強し、臨床もやり、1966年留学を終えてミャンマーに帰りました。もう日本に二度と戻っては来られないでしょうと、本当に悲しかったんです。山手線にも都電にもバイバイしました。その当時はまだ都電がありましたよ。山手線、10円で乗れたんですね、昔は。

ミャンマーに帰ると、厚生省が「あなたは

何を勉強してきたんですか?」と聞くので、私は「超音波の先端装置」と答えました。さっき、マレーシアの先生がおっしゃった通り、ビルマ（今はミャンマーと言いますけれど）はイギリスの植民地ですから、昔から東南アジアはイギリスかフランスの植民地、タイ国を除いてね。ですからビルマではイギリスの資格はものすごく認められているんです。

「私は東大の博士です」「なんですかそれは?」。この人困るねと私、思ったんですね。日本なら「ああそうですか」とすぐわかりますけれど、ミャンマーじゃ誰も知っている人はいない。それで、日本で何をやってきたかということを見せたんです。英語の言葉に「プリンはどう見えても食べてみて美味しかったらそれでいい」と、ありますけれど。ブルーフ（証明）が大切と、私が仕事をやって見せると、なるほどこの人は日本で勉強しましたね、ということを認めてくれたんです。それでもやはりイギリスの資格がないと困ると言われ、1970年から2年間イギリス政府の留学生としてイギリスに行きました。エジンバラ大学です。

私がミャンマーに帰る前は、超音波診断装置を使う脳外科医は一人しかいなかった。私は二番目でした。それで病院にいる時間の方が家にいる時間より長かった。夜、患者さんが来ると、その診断装置を使って脳の中を調べます。例えば、左側に血腫があると真ん中や反対側が圧迫されていますから、すぐ分かる。X写真をみて、夜でもすぐ手術をしました。日本の先端装置のおかげで、たくさんの人たちの命を私は救うことが出来ました。

イギリスに行って見たら、聴診器とハンマーとで診断するのが普通でしたから、日本はその当時には非常に進んだ国だったことがわかりました。ただ、日本は脳神経外科というと

頭しかやらない。頭の手術が中心です。イギリスでは背中のヘルニアの手術なんかも脳外科医がやります。日本ではそれは整形外科医の分野ですね。それで、イギリスでは脊髄の手術なども覚えました。

ミャンマーに帰ってきて、5年後、77年に今度はフランスにもう一度留学することが出来ました。イギリスに行った時は、電車を見てもちょっと暗い感じで、日本の新幹線と比べると、少し遅れていると私思ったんですけど、フランスに行って電車、TGVを見たら、あ、これは日本の電車によく似てて先端技術が使われていると思いました。で、フランス語を勉強したら好きで好きでもう止められないんです。それで7年間もフランス語を勉強しました。フランスでも難しい手術をやるんです。皆さんフランスといえばワインとかそういうことしか思い浮かべないと思いますけれど、パリは、私の見た限り脳神経外科のすごく進んでいるところでした。そこに2回も行くチャンスがありました。一回目は9か月。フランス語をウィチという街で2か月勉強した後、パリで脳外科の実習をし、そこでフランスがいかにメディカルサイエンスの進んだ国であるかということもわかりました。

フランスから帰国後、1979年に在日ビルマ大使館の第一書記官が脳腫瘍になりましたが、その手術をしたのは、慈恵医大の中村先生でした。東大の私の先輩です。悪性腫瘍ですからもう1か月くらいしか持たないから、誰かビルマから医者を寄こしてほしいという話があり、たまたま副厚生大臣が私を知っていたので、こちらにも日本語の喋れる人がいますから行かせます、とって私が日本に来たんです。79年の9月頃です。結局、日本には4日間いたんですけど、その時、私は、穂積五一先生にお会いしてお礼を申し上げること



① シュエダゴンパゴダ



② 1959年、箱根で



③ 学会のあった弘前で



④ 東大赤門前で



⑤ 学会で



⑥ 日本語弁論大会に参加



⑦ 弁論大会で3位に入賞

が出来ました。穂積先生に、東大正門前のお寿司屋さんに連れていかれて、いろいろご馳走になり、非常に楽しい思い出になっています。

その後、1982年にもう一度JICA（国際協力事業団、当時）の研修生で3か月間、日本へ来ました。その時、文京区役所に行きましたが、昔、私が知っていた文京区役所は小さな家でした。それがこんなに立派な高い建物になった。非常に嬉しかったんですよ。本当に変わりました。

それでは、これから日本での写真、思い出をちょっとお見せします。

2番はミャンマーがここにあって日本はそこにありますということ。3番目、これはミャンマーの面積と人口がどのくらいあるかとい

うこと。タイがどこにある、中国がどこにあるかです。(①) これは、シュエダゴンパゴダです。日本ではビルマの仏教を小乗仏教といいますが、その人たちの非常に大事なお寺です。これは今の時期、フェスティバルで明るくしてあります。タイにもこういうことがいろいろありますね。(②) これは清水先生が真ん中に座っています。非常に厳しい先生でした。1959年の箱根で撮りました。(③) 次は、りんごがたくさんできる弘前に学会に行った時の写真で、私が一番右側にいます。(④) これは私がコートを着て赤門前にいる写真です。これは東大の医学部図書館。東大も立派になりました。その当時も立派でしたが、建物も増えて。(⑤) これは学会。脳神経外科の学会。学会であちこちに行くのが楽しみでした。

(⑥) それから、私は言葉を覚えるのが好きですから、いつも弁論大会に出てました。5年も続けて。なかなか入賞できなかったのですが、最後は、この人はしょうがないと思って国際教育振興会が感謝状をくれました。(⑦) これは日本語弁論大会で三位になった時で、



⑧ 岸元総理大臣を迎えて



⑨ イギリスの教授と診察



⑩ ミャンマーの風景

私は右側にいます。一位のドイツ人は奥さんが日本人で、ドイツ大使館で日本語を専門に勉強しているんですよ。日本語が彼の仕事。それでこちらはアメリカ大使館の人。その人も日本語の専門家ということで。私は医学の専門家でも三位になったんですよ。あとはスリランカとか、他の国の人たちが4位と5位、真ん中に先生達が立っておられます。

次は、これがアジア文化会館。残念ながら私には皆さんに見せる穂積先生の写真がない。ミャンマー語でいいますと、「大事にしまいすぎて、どっかにいってしまった」。探しても、探しても出てこず、ものすごく悲しかったです。(⑧) これは、岸元総理大臣がアジア文化会館を訪問された時、新年会と思えます。私は学生文化会の会長だったんです。これは、佐野先生と私と医学博士栗田先生です。これは、我々のABKの仲間です。真ん中は工藤さん、小木曾さん、それにAOTSの佐藤正文さんです。これは、みなさんご承知のようにアジア文化会館の今の姿です。

(⑨) これは、ミャンマーに帰ってイギリスの教授が来た時、患者さんを調べてる時の写真です。(⑩) 最後に、ミャンマーには、こういう山の上に、寺院がたくさんあります。皆さん、今度ミャンマーにも遊びにいらしてください。ありがとうございます。

石井：ありがとうございました。

⑦

元技術研修生の進化 印日提携でIT企業誕生

M.R. ランガナタン

(Mr. M. R. Ranganathan ; インド)

会社経営、AOTS-ABK 同窓会チェンナイセクター会長、前南アジア AOTS 同窓会連合インド代表。元 ABK 同窓会研修生 (東亜建設)

石井：それでは続きましてインドからランガナタンさん、よろしくお願ひします。

ランガナタン：皆さんこんにちは。私はランガと申します。私は留学はしたことがないけれど、ABK (アジア文化会館) 同窓会スカラシップで半年くらい東亜建設という会社で研修しました。国へ帰ると、日本でいろいろお世話になったから僕も何かやらないとダメですよということで、ABK 同窓会を作ったんです。一番はじめ私が東亜建設に入った時、私の日本語は下手でした。今も下手だけど、もっと下手でした。研修生の時は、もともと現場の仕事ですから目で見ても学ぶというのは簡単だけど、一番初めに僕が覚えたのは、毎晩仕事が終わったら「一杯やろう」という言葉でした。二番目に覚えた言葉は「ハシゴ」です。一杯やってハシゴして、磯子のYKC (横浜研修センター) に帰る時は、一番最後のバスも

出てしまって、磯子の山の上の団地の中にあるYKCにちょこちょこ歩いて帰りました。そうすると、YKCの食堂の皆さんが僕のために特別のお弁当を作っておいてくれたりしました。でも皆さん、「ランガさん、あなた二日酔いはダメよ」と言うんです。私もそれよく分かっていますから、「二日酔いにしないで毎日酔いにしていますよ」と、言うくらいよく飲んだり、そして時々ちょっと勉強もしていました。

僕の友達、熊谷（清彦）さんが一番初めに知り合った日本人なんです。僕と彼が1969年に会って、彼のおかげで僕はABKのスカラシップ（奨学金）をいただくことができました。4年前、熊谷さんはお腹のガンでなくなりましたが、僕は日本に来ると、いつも彼のことを思い出します。

今日、私のテーマは、同窓会はインドと日本の間のIT産業のために何ができるか、ということですが、それ以外に我々がどんな活動をしているかということも、紹介させていただこうと思いスライドを作りました。今から、コメント付きのスライドショーをやるので、よろしくお願いします。

インドと日本の間は、多分、一番初めに仏教がインドから日本に入ったという、その時から日本とインドの関係が始まったんだろうと思います。その次は、辛島（昇）先生、大野（晋）先生という日本の専門家の方々がタミールナドでタミール語のリサーチをして、タミール語は僕の言葉なんだけど、日本語のオリジナル（起源）はタミール語じゃないか、という説を出された。うちの言葉と日本語の文法はだいたい98%くらい似ているんですよ。だからわかりやすい。日本語を使う時、頭の中でタミールの言葉で言ったらどう言うかな、と考えれば何とかできるだろうと。

三番目は、2002年はインドと日本の間



M.R. ランガタン氏

の 50th Anniversary of Establishment of Diplomatic Relation, Japan & India（日本-インド間の外交関係樹立50周年記念）です。左側にあるタ・ジマホールは日本の切手。そこにある切手（日本の歌舞伎とインド・ケララ州のカダカリダンス）はインドの切手なんです。元々インドには日本の全てのメーカーの車やモーターバイク、なんでも入っています。だからITだけじゃなくて、今、日本にとって大きなマーケットは、中国の次はインドだろうと思います。もう一つ、インドもこれから生産と輸出をうまくしないとグローバルマーケット（世界市場）でコンピート（競争）できないということをよくわかっているの、今、日本の専門家がインド来て、いろいろな工場で教えているんです。これまでにインドの会社が13社、デミング賞をもらっています。また、TPM、クオリティーメダルをもらっている会社もいっぱいあります。だから日本はイ



① 同窓会創設メンバー



② 同窓会が入居する建物



③ 同窓会が入居する建物2



④ 同窓会事務所の入り口



⑤ ABK-AOTS 同窓会



⑥ 同窓会の日本語スクール

ンドの大先生、インドは日本の大きなマーケット。そういう時代にこれから入るんじゃないかと思います。

今は中国は日本にとって一番大きなITのパートナーだけど、二番目はインドです。でも、日本は、インドのIT産業におけるシェアは4%だけです。私も日本のITマーケットに15年前から入っていますが、一番大きな問題点だと日本のお客さんが言っているのは、言葉の壁です。それで、インドのIT会社はみんなアメリカで仕事をしています。日本語を知らなくても大きなマーケットはアメリカにあると。でも最近、5年位前から日本は我々の大きなマーケットになるんじゃないかと予測して、一生懸命日本語を勉強するインド人、インドのIT産業の方々もどんどん増えてます。我々の同窓会、チェンナイ同窓会もそれに関連していろいろやっていますので、そのストーリーをこれから説明させていただきます。

一つは、我々がいろいろなIT企業からJapan Day、日本を紹介するJapan Dayを

やってくださいと頼まれて、日本についてのビデオを見せたり、いろいろなことをやってるんです。今年は特別に日本とインドのFriendship Yearなので、それを今年のロゴにしてあります。3年前からその話はあって、ちょうど2005年に小泉首相がインドにいらっしゃった時から、今度2007年はインド-ジャパン・フレンドシップ・イヤーにすると決めて、今年、インド側、日本側、双方からいろいろなプログラムを出し合っているんですね。11月には日本から14名の江戸職人というグループが来まして、江戸時代のものを紹介することになっています。

次は、うちの同窓会の活動についてスライドでお見せします。

① これは一番初めに我々が同窓会を作ろうとして、73年に集まった時で、僕の友達の熊谷さんが真ん中にいるんです。一番右側にいる白い服のが僕なんです。② これはうちの同窓会で、この建物の3階がうちの同窓会の事務所です。チェンナイの街の中心にあり、



同窓会の機関誌

自分たちで買ったものです。レンタルじゃありません。うちの同窓会のものなんです。だから何でも私たちが好きなプログラムが出来ます。(③) この建物の6階もうちの同窓会のオフィスです。(④) これは我々の同窓会の入り口のところです。一番上を見ると穂積先生の絵が描いてあります。だから毎日それを見ながら穂積スピリットで仕事をする。笹川財団の方からお金を戴いてこの場所を買ったので、左側には笹川さんの写真が掛かってあります。入ったらすぐのところ。だからどちら側もあるコイン。こちらのサイドを見る時は裏は見えない。裏を見てる時はこちら側は見えない。どちらを見たらいいかは自分で決めてください。

(⑤) それからこれは、ABK-AOTS 同窓会センター。私は留学生じゃなく、研修生としてほしい半年位、ローマ字で日本語を勉強して帰ったんです。今もまだ僕は漢字の読み書きができません。しかし、インドの中には8つのAOTS同窓会がありますが、その中で我々のチェンナイだけ、ABK-AOTS 同窓会という組織を持っているんです。

次のスライドは、今の同窓会のプログラムです。(⑥) これは、私たちの日本語スクールです。次は、私の同窓会の事務所です。

同窓会活動のまとめとしては、一つは同窓会の活動センター、二番目は日本語学校、もう一つは、インド・タミールナド州チェンナイ市にあるいろいろな産業の訓練センターです。そこでは、ほとんど日本のマネジメントを教えています。

また、日本の文化をインドの皆さんに紹介する、日本についての情報を発信する、タミールナドの人々に日本について知りたいという気持ちをかきたてることも我々の責任と思ってます。

また、いろいろな社会人コースもやっています。5S（整理・整頓・清潔・清掃・しつけ）、日本とインドの間のトレード・プロモーション（貿易促進）、一番最後はJLPT（日本語能力試験）。JLPTの南インドでの実施は私たちの同窓会が担当しています。

これはうちの同窓会の紹介のプロシユア（冊子）です。うちの同窓会はタミール州政府にレジスター（登録）されている組織です。今は大体400名のメンバーがいるんです。その他、同窓会は技術的な翻訳・通訳のサービスも行っています。

この後は、写真だけですから2分くらいで終わると思います。

次は、我々は「壁の壊し屋」です。言葉の壁を壊す、インドのITカンパニーの中で日本語で仕事ができるようにするというのが、我々の責任だと思っています。これは、一番初めに我々が作った日本語学校と初めての学生達です。一番左側は私です。私が教えているんです。みんなローマ字で書いています。(⑦) これは、現在の学校です。ほしい650名位が毎年勉強しています。(⑧) これはJLPT（日本語能力試験）のための模擬テストをやっているところです。これはJLPTの担当として



⑦ 現在の日本語学校



⑧ JLPT 模擬テストの様子



⑨ 5Sのコンベンション



⑩ 日本からの見学者



⑪ 5円玉の宝船



⑫ クイズ大会

我々がやっています。これは JLPT の受験希望者のための一日半プログラムをやっているところです。あとは国際交流基金と協力して日本語教師の訓練コースもやっています。これは、我々のライブラリー（図書館）です。我々の新しいライブラリーです。朝の10時から夕方6時まで開いています。あとは派遣コースとして日本の経営研修プログラムがあります。これはタミール語と英語でやります。プログラムは1年間のスケジュールが組まれています。これはそのプログラムを実施している同窓会のメンバーで、彼は日産自動車の研修生でした。これはセミナーホールです。各プログラム大体65名くらいでやっています。これは、我々が作ったプログラムの教材です。(⑨) 5Sの大きなコンベンション（大会）がチェンナイでありました。5Sのトロフィーです。5Sコンベンションは、いろいろなタミナールナド州の工場のプロモーションのためにやってるんです。これは、アフリカの研修生、エジプトの研修生、みんなチェンナイまで来

て、ここでベスト・プラクティスの訓練プログラムをやったときのものです。これは、ワールドネットワーク・フレンドシップのプログラムです。これはインドと日本の間のカルチュラル・ブリッジ（文化の架け橋）の講座。これは、日本のハンディクラフトのエキシビション。毎年1月、2月には生け花のエキシビションやります。チェンナイでずっとやっています。3月はひな祭りをやるんです。(⑩) 本間さん（タミールナドに調査にきたABKのスタッフ）、いろいろ学生が来て見学します。あとはジャパニーズ・スタンプ（日本の切手）イグジビション。私は、いろいろな国々で発行された日本と関係のある切手をだいたい1万枚くらい持っているんです。各切手には歴史があるから、そのストーリーも書いて展示するんです。次は、ジャパニーズ・コインズ（日本の通貨）のイグジビション。(⑪) これは5円玉で作った宝船です。(⑫) あとはクイズ大会。チェンナイにある全ての学校が参加するクイズ大会なんですよ。例えばこのようなス

ライドがあります。だいたい8,000位の質問とそれの答え。それ全部をCDに作ってチェーンナイにある全部の学校に無料で配るんです。本で読んでくださいと言っても誰も読まないから、CDに作って配るんです。毎年やっています。あとはトークのプログラム。テーマは環境問題など。まだまだありますけど時間がなくなりました。申し訳ありません。ありがとうございました。

石井：どうもありがとうございました。今ランガナタンさんの話を聞いて思ったんですが、皆さん今日、10人のうち9人までが留学生だったわけですけど、留学生以外にですね、やはり日本とそれぞれの国の掛け橋となっておられる元技術研修生としておられたランガナタンさんの話を聞いて大変私、感銘を受けました。そこにも穂積先生の影響があるということを知って、単に我々は留学生のことだけを考えるんじゃなくて、普通はですね、技術研修生なんていうのはある技術だけ持って帰ればいいわけで、別に日本人と付き合わなくたっていいわけですけど、今のランガナタンさんのようにそこから本当に広がって、留学生に負けないくらいの活動しておられるという、大変私、感銘を受けました。

もう一点ですね。さっき辛島昇先生の話が出てきたんですけども、日本人でインドと、実は日本のインド研究というのは北インドに偏っていたんですね。で、おそらく辛島先生が初めてタミール語をやられてですね、そしてずっと今もタミール研究の、まさに世界的な権威になっておられますけれど、そういう辛島先生のような方もですね、日本人でありながら、インド、特に日本人があまり研究していなかった、しかし非常に大事な文化的にも高いものを持っているタミール、のことを

やっておられるという、そこにちゃんと目配りをしてくださっているということで大変嬉しく思いました。ありがとうございました。

8**日本の固有（伝統）技術移転の壁**

ノリブン・ホラス

(Mr. Noribun Horas ; インドネシア)

インドネシアと日本にまたがる会社経営。東京水産大学大学院卒

石井：それでは続きましてインドネシアのノリブンさんをお願いします。

ホラス：みなさんこんにちは。インドネシアのホラスと申します。私とABKの関係について少し触れてみますと、留学当時、国際学友会日本語学校の寮にいましたが、当時の財団法人国際学友会というのは外務省の管轄内で天下り人事の為か、累積赤字を抱えており、どうしても土地を売却しなければならないということで、我々は退館せざるを得なくなりました。その時ABK（アジア文化会館）が助け船になってくださり、お陰様で私も文京区の一区民として生活できたということは光榮に思っております。

私の出身はインドネシア東南部のオーストラリアとインドネシアの境界線にあるアラフラ海に浮かんでいる一つの小さい島。この島は一般のインドネシア人でもよく知らない島ですけど、世界の生物学者にはよく知られている島で、かの有名なダーウィンの進化論の説を支えた英国の有名な博物学者ウォーレス氏がそこで研究をした形跡があるという、自

慢の故郷であります。

さて、30年前私は希望を持って日本にやってきましたが、それは、当時、第2次世界大戦の前から故郷の島で真珠関係の事業を営んできた父の夢でもありました。なぜかという日本は世界の真珠王国でもあり、また同じ東洋圏でありますから、差別も無いということで嬉しくこちらに到着しました。

まあ、無事に自分の希望した大学、東京水産大学、現在の東京海洋大学に合格して、そこで資源増殖を専攻しました。そして3年生の時に、そろそろ論文のテーマを決めなければならない時期になり、指導教官といろいろ相談しながら研究室も選ばなければならない時期にさしかかった時でした。私はそこで大きな壁にぶつかりました。もともと日本に来るのは真珠養殖の技術を学ぶ

ためでしたが、ご存知の方もいると思いますが、当時、日本の通産省から打ち出された真珠事業における三原則の一つに、日本固有技術を海外に移転してはいけない、つまり、外国籍の人に教えてはいけないということがありました。二番目の原則は、日本企業が海外に進出した場合には、生産した真珠は全て日本に持ち帰らなければならない、そして第三の原則は、真珠は10ミリ以下のものは輸入してはいけない、という私にとってはすごく矛盾した原則でした。

こういった厚い壁に立ち向かって私は挫折感を感じながら、方向転換をせざるを得ない宿命になりました。その当時インドネシアが一番盛んに行っているのはエビの養殖でしたので、非常に単純な理由でエビの研究に一時

方向転換をすることにしました。同じ水生生物でも、私の専攻は人工種苗生産、遺伝育種でした。ですから、これは後々私が真珠事業を展開するために基礎として役に立ったことを思えば、学校で学んだあらゆる知識は、決して無駄なことでは無かったということ、今非常に思っています。

修士課程を修了してから何年間か日本の社会で社会人としての経験させていただきました。そして1988年、80年代の後半ですね、我が故郷に帰って、さきほどその名前を申し上げたか忘れましたが、アル諸島の、小さな

島なんですけど、その故郷に帰って、大学の先輩と一緒にごく小規模の真珠養殖事業を立ち上げました。

しかしながら私は外国籍のワッペンを背負って、この業界でやっていくのは非常に前途多難でした。これ

は日本の固有の技術であるだけでなく、昔からよく言われていますように、日本の固有伝統というのは徒弟制度ということもありますね。日本人同士でもそうなんですけれど、弟子が師匠からものを学ぶのではなくて、師匠の業、匠を盗みなさいということがあり、日本人から学ぶのが非常に困難でした。先ほど申し上げた通り、真珠養殖事業というのは特殊な業界であって、今のインドネシアの業界はもちろん盛んにやっていますけれど、ちょうど日本の50～60年前の真珠会社の状況に相当すると思います。

この業界では、確かな技術を習得した後、会社の利益として守ってなかなか外に放出することは出来ません。それから、日本とイン



ドネシアでは技術の違いがあります。例えば日本で習得した技術を仮に持ち帰っても、まず直面するのは海の性質の違いですね。つまり温帯と熱帯の海の違いと、そこに生息している真珠貝の生理的また生態系の違いがありますから、直接的な技術移転ということはやはり工夫しなければなりません。もう一つは、インドネシアの真珠養殖企業も非常に閉鎖的ですから、互いに勉強してより確実の手法を探るのはなかなか出来ないという点もあります。

真珠を作るのは私の夢であり、また父の夢でもありますけれど、普通の真珠を作るのは、まあ誰にでもできるのじゃないかと思えますけれど、世界一とは言わなくても、より質の良い真珠を作るのが私の使命でもあって、ご承知の方もいるかもしれませんが、インドネシアの真珠は南洋真珠と言って、貝も大きく大粒の真珠がとれるのは特徴で、しかし日本真珠がもっているような照りが殆どないです。

日本真珠というのは10ミリ以下のものでも、素晴らしい照りを持っています。この二種類の真珠をコラボレーションでやっているとなかなか面白いんじゃないかということで1999年の後半、私は鹿児島県の友人と大隅諸島のある島でこの行事に着手しました。とてもいい真珠がとれましたけれど、残念ながら大隅諸島というのは毎年毎年台風の通路になっていて、台風の被害でなかなか企業ベースには乗りませんでした。

そして近年、新たにですね・・・(①)ここに映しているのは我が国のバリ島の北部の海ですが、ここで2年前から養殖場をかまえました。ここにあるのはロングライン方式の筏で、この筏のキャパシティーはだいたい



ノリポン・ホラス氏

10万位の真珠貝が収容できますが、当時はまだ真珠母貝は1万位でした。この写真は筏を整備しているところですね。

(②) これは貝掃除の風景ですが、貝ももちろん生き物ですから、いい真珠を作るのはやはりケアも必要ですね。手入れしなければ、健康管理をしなければなりません。これも貝を掃除しているところなんです。

(③) これもうちの従業員達の様子なんですけれど、ここにある四角いバスケットは南洋方式のもので、そこに母貝を並べています。もちろん沖の海のところまで畜養します。これはちょっと汚れてますけれど、真珠を作るためには手術しなければなりません。手術する前の前段階の仕立てという工程でわざと生理的に鈍く(鈍感に)させてあります。

(④) そして仕立てした真珠貝をカゴからとり出して小さなカゴに並べているところなんです。

(⑤) これは私で、とても汚い写真なんですけれど、手術の風景で、貝の体内に特殊なメスを使って切口を付け、真珠となる元、核を挿入し、真珠層を分泌する細胞を移植するのがこの工程。(⑥) 手術したあとの貝をまたきれいにカゴに並べてまた海に戻して安静さ



① 養殖場



② 貝掃除の様子



③ 母貝を並べる従業員



④ 真珠貝を並べて手術の準備



⑤ 手術の様子



⑥ 再び沖出し

せて、その後沖の海に出します。そうすると1年～2年の歳月を経て真珠が出来るという仕組みになってますね。

これは先ほど述べた大隅諸島で、まさに南洋真珠と日本真珠のコラボレーションの作品なんですけれど、なかなか素晴らしい照りがあります。

これは南洋真珠の大きさ、その大粒の真珠は南洋の特徴です。そのゴールドパールというのもご存知だと思いますけれど、茶金ですごく珍重されている真珠で、マーケットで高い値段で取引されています。

これはシルバー、また紫、いろんな色が出てくるというのが大隅諸島の素晴らしいところなんです。

私の仕事ぶりの報告はこれで終わりますが、技術移転、技術指導、人材開発というのはもちろん日本政府も力を入れてODAという形を通じて世界各国で行っており、インドネシアも例外ではありませんけれど、インド

ネシアで何人かの日本の技術指導員と面識もできまして、いろいろお話しする機会もありました。実はそういう方々は、企業を定年退職したシルバーパワーであって、現地へ行っても、まず現地への適応性、異文化とのコミュニケーションにギャップがあり、語学の厚い壁もあって、自分が持っている技術や知識をうまく現地に反映できるかどうかすごく疑問感を持っていて、結局2年間でこの人たちは日本に帰ってしまい、現地には何も残らない、ゼロに等しいという結果に終わり、従来から言われてきた日本の技術協力の問題点が、今も何も変わっていないという現状があります。

その面ではやはり、我々留学生、本国に帰って活躍している人たち、また日本と祖国で距離を置いて事業展開する元日本留学生達は、よく日本の事情を知って、また本国の事情をよく知り尽くしており、言葉も両方の言葉ができますから、まさに即戦力になれるわけで、今後ともそういった国際協力、また日本との祖国との関係の技術移転に関しては我々留学

生の役割は大きいと思います。

最後になりますが、私もアジア学生文化協会には大変お世話になりまして、この場を借りてアジア文化会館の皆様、また文京区の市民の皆様にご心より感謝を申し上げて私の話を終わらせていただきます。

どうもありがとうございました。

石井：ありがとうございました。先ほどからノリブンさんのお話を聞いてノリブンさんは日本人じゃないかと思って、インドネシア語はできるんですかと聞こうかと思ったわけですけど。日本で真珠のことを勉強されてですね、インドネシアで活躍されている。さきほど、ランガナタンさんがおっしゃった辛島先生のもう1人、大野晋先生の話をしてましたけど、大野晋さんが「日本語の起源」というのをお書きになって、タミール語と日本語の非常に共通項が多いと。これについてはいろんな意見がありまして、タミールナドから日本まで何のために来るんだなどという議論があるんですけど、「国際人」をお書きになった大野先生の本だと、実は日本は真珠が有名で、おそらく真珠をとりに来たんじゃないかというようなことを言っておられたことを思い出しました。

しかしノリブンさんのお話を承ると、やはり技術移転にはですね、技術的な問題だけじゃなくて日本の制度の問題、いろいろ問題があるということで、こういうこともまた日本での経験をされた方がやはりずいぶんご苦労なさると思うんですけど、ぜひそういう問題点を日本にフィードバックしていただいて、関係がよりよくなることの一つのきっかけをつくっていただければありがたいと思います。

どうもありがとうございました。

9

奇跡の大学建設 泰日工業大学

スポン・チャユツァハキット

(Mr. Supong Chayutsahakij ; タイ)

泰日工業大学評議会議長、泰日経済技術振興協会顧問、バンコク高速道路(株)取締役副会長。
工学修士(東京大学)

石井：それでは続きまして、泰日工業大学という、まさに奇跡の大学と言いますけれど、日本の留学生が中心になってタイに作ったその中心人物であるスポンさんからお話を伺いたいと思います。

スポン：みなさんこんにちは、タイのスポンです。泰日工業大学の話でいろんな資料をたくさん準備しましたが、大学の話はもういろいろなところでされていますので、大学が出来た裏の話を紹介したいと思います。

まず、自分の紹介をしますと、僕は日本政府奨学生として昭和36年、1961年日本に留学しました。その時、バンコクの日本大使館で僕の面接官の方はこの石井米雄先生だったんです。46年前に初めて会って、先生は今日までずっとタイの関係で活躍しておられます。本当にありがとうございます。

僕は日本に参りまして、日本語を勉強して東大の電気工学部を卒業しました。これが1966年です。更に、修士課程まで勉強して、68年帰りました。アジア文化会館に入館したのは66年頃です。在館は2年半くらいですね。会館に住んでいた間は、穂積先生にほんといろいろ教えていただいたけれども、僕は頭が悪いから先生の教えはあまり深く理解していない。南北問題とかいろいろそういう話を

聞いてもよくわからないところがあって、覚えているのは、卒業してから国に帰ってがんばって仕事をして、また出来れば社会に貢献して国を発展させなさい、日本に負けなように発展させなさいということだけでした。

それで、帰国して問題を見つけたかということと大きな三つの問題を見つけたんです。

一番目は、当時、日タイの関係は悪化していました。反日運動が激しく、さっき石井先生がおっしゃったのは「ニーブンクン」ですね。僕は奨学金をもらってその恩がありますから、どういうふうに謝恩するかということいろいろ考えました。できれば両国の親睦親善の活動をなんでもやりたいと。二番目の問題は、ちょうどその頃はタイ国の工業化が始まったところで、工業化してこれから国を発展させるためにはどうしたらいいか、いろいろ考えました。日本へ留学するときにはもともとは医学を勉強することが望みだったけれど、結局は専攻を変更して工学を学びました。タイへ帰ってきてからは、たった一人の卒業生で何ができるのか、何もできないんじゃないかと疑問を持ちました。10人でも難しいんじゃないかと悩みました。

ABKにいる間に、隣にあったAOTS（海外技術者研修協会）のいろんな活動を見て、ああこれはいいなあ。現場でノウハウを勉強する、長期トレーニングの形で各国から研修生を連れてきて三か月とか半年訓練して、帰ると工場も運転できるようになる。これは一番いい方法じゃないかと僕はものすごく感心しました。だから、できればタイでもこういう活動をやりたいなというアイデアが僕の中にできました。三番目の問題は何かというと、やはり自分のことです。日本留学から帰国してもタイの社会では高く評価してもらえなかったんです。やはり欧米帰りの方がまず

優先。僕は高校の成績も悪くないし、国家試験も2番目くらいでした。でも留学から帰ってから僕の方がぐっと上の方に行くということではできませんでした。

なぜかと考えたら、やはり日本の留学生の実力や実績が示せていないからじゃないかと。だからいくら泣いてもしょうがない。やっぱ我々が実力を見せないといけないと考えたわけです。ただ僕が一人で考えたんじゃないで、先輩や後輩たちが全部同じ気持ちを持っていました。そして、こういう話を穂積先生に何度もして、どうやってこの問題を解決するのかといろいろ検討しました。

その結果、これから紹介しますTPA（泰日経済技術振興協会）の案を考えて、これから作りましょと、72年頃に東京にJTECS（日・タイ経済協力協会）を設立、もちろん穂積先生が理事長を、そして、翌73年1月にバンコクにTPAが設立され、この機関を利用していろいろな活動をやりましょということになりました。

先ほどご説明した3つの問題は、現在どうなっているかということを紹介いたします。

日タイ関係は30年ほど前とはだいぶ違って、今は密接な関係になり、ベリーグッドパートナーになっていると言っていいでしょう。特に10年前タイがトム・ヤム・クンの事件（通貨危機）があってから、日本からいろいろ援助を受けて、日本の考え方をよく理解して、今、日本のプアン・テー（石井先生はよくわかる。真の友人）になって良くなりました。

二番目の問題点は、工業化は30年前からはだいぶ進んで、今はタイは何とか一つの生産基地にもなりました。3番目の元日本留学生がどうなっているかという問題ですが、今はもう欧米組に負けなように横に並んでい

るか、かえって上回るくらいの立場になりました。それは、もちろん、我々がこの協会（TPA）をつくったその成果が全面的に出たとはまだ言えませんが、ただその成果の一部は貢献したんじゃないかということはできると思います。

ここで TPA の話をちょっと紹介します。

TPA の事業は、まずメインの目的がテクノロジー・トランスファー（技術移転）、です。その中心的な活動は社会人のための産業セミナーです。現在、年単位で1,700以上のコースを行っています。参加者はだいたい7万人位。これはセミナー参加者が6万、それにインハウストレーニングの参加者も1万位、合わせて7万人がセミナーに参加しています。

二つ目は、技術関係の本を作ります。今日までだいたい400タイトルの技術の本を出版しました。これに文化・語学関係も入れると500タイトルに近くなります。30数年間でだいたい500万冊くらい売り出したと思います。低価格で売って、タイ全国で、特に専門高校、短大のレベルでいい教科書があまりなかったので、日本語から翻訳した技術の本が教科書として使われています。まあ教科書でなくても参考書としてはたくさんの学校が利用しています。

三つ目が、日本語学校。これは日本語だけじゃなくてタイ語の学校もあります。たぶんタイで一番大きな日本語学校じゃないかと思っています。年間あたり1万人以上が勉強しています。

それ以外にもいろんな事業がありまして、例えば計測器の校正センターもやっています。これは各企業などの計測機器の検定・校



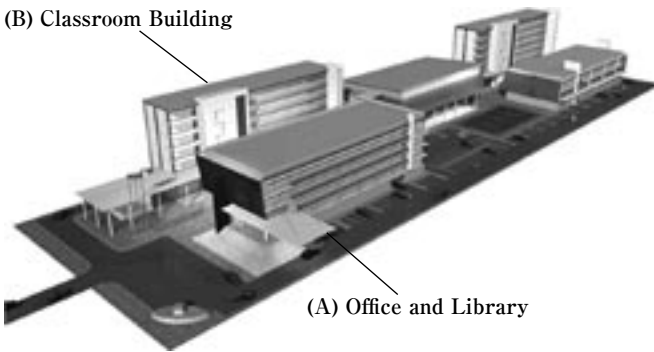
スポン・チャユツアハキット氏

正サービスをやるんですが、今ではお客さんも3,000社位、特に中小企業を中心に3,000社位のお客さんがあって、年間あたり3万位位扱っています。

その他、中小企業の診断事業、コンサルタント事業、さらにロボコンも TPA が主催してやっています。

会員は、今、正会員が1,800人、準会員が5,000人位。法人会員が3,000社位、合計で1万位の会員数になっています。従業員が350人、年間でだいたい円換算で4億円位の活動をこの協会はやっております。

ところで、TPA ができた時、目的を書きます。将来、専門学校、大学を作ると、30何年前に書いてあるんです。ちょうどこの協会が30周年の時、会員のみなさんにアンケートを出して意見をまとめたところ、その中に、昔、大学を作るという話があったけどもどうなったか、という質問が入っていました。そこで、それから2年間、いろいろと調査・検討会をやって、2年前に遂に決心して工業大学を作ろうということになったんです。問題はお金です。協会は儲けるところではありませんから大学をつくるのに十分な資金はありません。ただ30年間にコツコツ貯めたお金がだいたい3億



① 現在の TNI

パーツ（約10億円）位ありました。ただそれだけで大学を作るのにはちょっと足りません。半分位しかありません。でも借金してでもやりましょうと、皆さんは総会で了解して、2年前から大学のプロジェクトが始まりました。

この大学のタイプはモノづくり大学、日本式のモノづくり大学をつくりましょうと。そういうものが、タイにおける現在の段階での工業化の発展に役立つと同時に、人材不足の問題も解決できると考えています。そのため自動車関係、電機・電子・通信などを中心にした教育を行います。

① これはモデルから撮った写真で、ちいちゃな規模でこのくらいの建物です。今全部の建物はまだ完成していません。これは5棟ですが前の2棟だけしか出来きてません。AとBだけしか出来てない。

次に、ここの特徴は何ですかという。まず日本語を勉強してもらう。タイ語で教えるけども英語以外に日本語を勉強してもらって、4年生になったら日本人の専門家を呼んで、日本語の講義でもわかるように考えたけども、今はちょっと無理じゃないかと思っています。少なくとも卒業して、現場で日本人のエンジニアなどと日本語で通じるくらいの日本語が勉強できるくらいのことを考えています。

2つ目は、産業界との密接な関係。この3

月に、我々の教えることが現場でほんとに利用できるように、工業界から専門家を呼んで、調整しながら一緒に特注のカリキュラムを作りました。

3つ目が実務的・実践的です。現場向き、実践的なことを考えてます。例えば夏休みだけじゃなくて、半年は現場で働いてもらって、そういう本当の現場の体験を

やってもらうことを一つの条件にしています。

次、試験的にですが、今年が日タイ関係の修好120周年ですから、今年は120人分の奨学金を与えます。バンコクでなくてもっと地方からの学生達に特に与えます。ただ奨学金といっても、授業料だけです。授業料は年間6万パーツ、約20万円を与えます。

次、今のところは1年目は三つの学部と大学院が始まりました。工学部は、自動車工学が今年始まりました。来年には生産工学が始まります。情報学部ではITは今年始まりました。来年からはコンピューター工学が始まります。で、経営学部は工業管理、IMですね、Industrial Managementが始まりました。日本語経営学コースは来年ですが、修士課程の方は先に今年後半に始まります。工業（工場）経営管理MBAコースが始まりました。その下を書いてあるイクスキューティブ・エンタープライズ・マネジメントコースは、中小企業向きのマネジメントで来年始まります。

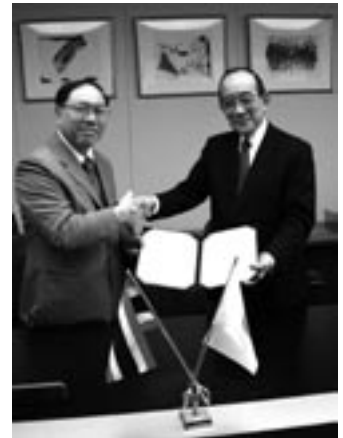
次②、大学の正面ロゴをよく見てください。これはアジア文化会館のロゴとよく似ています。次③、だいたい場所が狭いのでこういう設備を置いて今やっています。だいたい学生が400から500人までで、最初は370人で今は430人くらいの学生がおります。来年度は1,000から1,200人くらいになります。次、



② 大学正面



③ 実習用設備



④ 日本の大学とMOUを締結



⑤ 新入生歓迎会



⑥ オープニングセレモニー

5年後にはだいたい3,000人くらいの学生を予定しています。

次、大学執行役員。現在の大学の学長は元留学生です。京大卒のクリサダ先生がやっています。副学長も東北大の出身。この中にも元留学生が多いです。例えば語学部長は東大教育学部の卒業生とか、経営学部長が京大卒からとかね。これが理事会、一番上は僕です。理事会も半分は元留学生です。半分はもちろん現地の専門家とか文部省と関係深い方も入っています。

次、日本関係の大学とMOU（大学間協定）を行いました（④）。赤で書いてあるのが既にサイン済みです。芝浦工業大学、九州大学、大阪工業大学、東京農工大、次にたぶんものづくり大学とも来月サインします。残りがだいたい年末かまた来年度には全部やって、これからこういう大学と学生交換とか、講師交換とか、カリキュラム交換とかいろんな活動を行います。

次（⑤）。これは学生、入学の雰囲気です。

次（⑥）、今年の8月2日、シリントーン王女がご臨席してオープニングセレモニーを行いました。タイではテ

レビにも出て、日本のほうにも少し出ましたね。で、日本からも大勢のお客さんが訪タイ、出席しました。特に森元総理大臣にご出席いただきました。

（⑦）これ、マーク見て下さい。これが本当のマークです。ABKとは少し違って、中にはTNIと書いてあります。

次、TPAでは毎年7月17日が協会の記念日です。その日は何の日ですか？「穂積の日」と呼びます。先生が亡くなった日です。毎年お坊さん呼んで式を行います。場合によって僕も時々、新入社員たちに集まってもらって穂積先生の話をします。僕は穂積先生から学んだことをみんなに伝えて、「穂積精神」を理解してもらうことはやっています。



⑦ TNIのマーク

大学の前に先生の銅像を設計しています。もう少し調整して来年か再来年くらいに人間の1.4倍くらいの銅像を据え付けます。皆さん、もしバンコクに来たら寄って見てください。

どうもありがとうございました。

石井: ありがとうございます。実は私も先日、泰日工業大学へお邪魔して、大変感銘を受けました。よくここまでやったということでありまして、留学生の努力でこんなことができるというのは非常に嬉しい。特に私自身もタイの大学に留学して、同級生の動向なんか見ますと、タイでは大学を出ることが目的なんです、極端に言えば。つまりBA(学士)だとかMA(修士)だとかとることが意味があるということなんです、まさに今お話があったように、泰日工業大学では実践的な技術者を教育するというので、その結果としてBAのいろんな資格が取れる。だけど目的はタイで今一番必要なのはそういう技術なんで、その技術を日本から移転しなきゃいけないと。そういう意味で大変実質的なことで、おそらくタイの大学の今までのコンセプトとはだいぶ違う、極めて先駆的な試みだと私は思っております、大変感銘を受けた次第であります。

今、スポンさんからお話があったように、全部で5棟あるのに2棟しか建ってないのですが、私もなんとかしてですね、外野席の応援団くらいにしかたないのですが、なんとかしてこれを完成させて、本当の意味でのものづくり大学というものの代表として発展していただければ嬉しいと思っております。

10

日本留学の功罪

ウォン・メン・コン (Mr. Wong Meng Quang; シンガポール)

元駐中国シンガポール大使、元駐日シンガポール公使。東京水産大学

石井: それでは最後に締めということでシンガポールのウォンメンコンさん、これはもと駐日公使でいらっしゃって駐中国シンガポール大使をされた方ですけど、日本留学の功罪ということでぜひお話を戴きたいと思います。

ウォン: 日本の落語会と漫才界には真打ちというのがおりますけれど、私は最後になりました、もうちょっと明るく、みなさんを眠らないようにする責任がありますから。

今日のテーマは、日本留学を帰国後どう生かしているかということで、私の与えられたのは、もっとも爆弾的なテーマで「日本留学の功罪」ということなのですが、ああ難しいなあ、ちょっと先生、耳障りな話しをしてもよろしいですか？

石井: どうぞどうぞ。

ウォン: まずですね、自己紹介をある程度させていただきますが、私、昔シンガポール植民地というところで生まれまして、おそらくこの部屋の中で私だけは自分の生まれた社会の中で、7つの国歌^(註)を経験した者でございます。小さい時、太平洋戦争でシンガポールが日本軍に占領された時に、まず「君が代」を覚えました。終戦後、1945年小学校に入った時覚えた国歌はゴッド・セーブ・ザ・キング、

英国。それから私が通ったのが中国語も教えていた学校で、今の国民党の国歌もちゃんと今でも歌えます。これで3つの国歌を経験しました。次、4番目が、1949年10月1日に生まれた、中華人民共和国です。5番目、1952年、英国国王が死んで今のエリザベス女王が誕生し、ゴッド・セーブ・ザ・クイーン。6番目、シンガポールは一時マレーシアと一緒だったんですがマレーシアの国歌も覚えました。そして最後は、我が独立シンガポール国です。

これをバックグラウンドにして、私が高校の時に幸か不幸か、私の同じ時期に日本に来られたヘン（フチョン）さん、そこにおりますけど、高校1年の時に、激しい植民地反対の動きが学生運動の中にも生まれてきて、私は政治界とは関係がなかったのですが、何か非常に運が悪くて、当時の秘密警察にマークされて、高校1年の時に除学されました。だから私は日本に来て安保反対運動を見た時、非常に懐かしいなあという感じがしたわけです。

で、4か月かかって、当時シンガポールには我々みたいな中国系の人たちを代表するところが無くて、やっと条件付きで他の高校に編入されました。それが終わって、私は成績上、英国に留学してよろしいと言われたんですけども、そういうバックグラウンドで育った私がなんで英国に行かなきゃいけないのか、と。私の問はまず自分に向かいます。私は何者であるか、と。私はシンガポール生まれのチャイニーズ。それが何？ 決まった国籍もない。昔の清の時代に日本に留学した中国人の立派な留学生達の本も沢山読みました。ニッポンという国はですね、過去に不幸な歴史があっても、この国を見てみたい、勉強してみたい、と思ったんです。明治維新がありました。尊王攘夷、和魂洋才というものもあり



ウォン・メン・コン氏

ます。どうしてそういう国がアジアで唯一の先進国、まあ戦争のことはさて置いても、になれたのかと。その好奇心半分と、プラスある程度の反逆心もあり、それに3番目の理由として経済問題もありました。英国にも米国にもすぐ留学できたんだけど、費用が1ドル360円の時代で月額8～9万円位かかりました。日本留学の場合は昭和33年、34年で2万から2万千円位でした。それが3番目の理由で、親のスネカジリももうほどほどにしようと思って、日本留学を決めたわけです。

日本への留学を決めて今度問題になったのが、政府、今のシンガポール政府じゃないんですよ。コロニー・オブ・シンガポール、ユナイテッド・キングダム、というところにまず当時の文部省関係者、英国人ですけれど、その次に大蔵省、デパートメント・オブ・ファイナンスというところに呼び出されました。その質問がね、どうしてお前は日本に行くのか、というんです。2年間、そう聞かれつづ



けました。それで私は、とにかく行ってみたいんだ、学問のことだけじゃなくて、と2年間答えつづけました。ところが、オフィサー達はですね、さっき先輩のアウン チョウさんも言われたことですが、第一に日本の学歴、学位は承認されない、東大の博士を持って帰っても何の資格にもならない、ということをお前承知するか、と。はい、私は知ってます、シンガポールで認めてくれなくても他のところで認めてもらえばいい。これが一つ。2番目はですね、当時世界にはスターリングポンド地域というのがあったんです。日本はスターリングポンド地域外、英連邦外で外貨の流出になりますから、外貨の流出を止めるための条件を付ける。私そのレターをまだ持っています。コロニー・オブ・シンガポール、どうしても行きたいならば、水産学か造船学、この二つに限って許す。(日本は水産学と造船学は進んでいたから)。ただ資格は認めない。技術だけ覚えて来いと。そして、日本の大学は4月初めに新しい学年に入るそうだが、学長のサイン入りの証明書を2枚、シンガポールの文部省とデパートメント・オブ・ファイナンスに4月15日必着で送ること。1枚は在学証明書、もう一枚は前年度の合格証明書。留年はしないということですね。この2枚の証明書を4月15日までに届けなければならない。そういう条件を呑んで、ようやく日本留学の許

可がでたんです。

日本留学は私にとってプラスだったのかマイナスだったのか。あるいは功か罪かということですが、私にはこれを全般的に論じる資格は何も無いんですけど、ちょっと総括的に言えば、特にアジアの留学生はですね、今述べたような非常に難しい条件、環境の中で日本に来ているんですよ。その上に卒業してもですね、日本は本当にいい国なのか、イミテーターに過ぎないじゃないか。あの国はコピーしかつくりたくない、戦争に負けたから自動車を作って、エレクトロニクスを作って売り始めただけじゃないか。英語も使わないような国にお前は どうして 行ってきたのか。そんな質問を今でも私は受けているんです。

皆さんは日本人が世界で尊敬されているというイメージをもっておられると思いますが、それは間違いでございます。だから冒頭、私が耳障りな話になるかも知れないと申し上げたのですが、東南アジア各国に行ってみてください。欧米はやっぱり優先されています。その理由は、やや歴史的な問題になりますけれど、550年前にヨーロッパの航海技術が急速に発達し、彼らが競って全世界に、アジアだけじゃなくて、中南米、アフリカにもあちこちに植民地を作りました。

それによって軍事力と宗教、経済、文学、教育、言葉など、一切、今日まで根が深い影響が及んでいます。だから日本の留学関係者の皆さんがこのバックグラウンドを頭に置いておかないと、留学生に単なる電気工学、医学などのハードだけ教えても、彼らはなかなか満足しない、という面が多々出てくるわけです。

要するに関係者の皆さんが、大学関係者だけでなく、企業の関係者もですね、それぞれの国の留学生たちの置かれている事情をもう

ちょっと研究なさって、留学生が何を希望しているのか、どこに問題点があるのか、アフターケアをどうすればいいか等について考えていただけないかとお願ひしたいわけです。

日本の留学はどこがむずかしいか、といひますと、まず、日本はアジアの国の中でアルファベットが通じない国です。日本語を習得するには漢字圏の人たちは漢字に不自由は感じないんですけど、非漢字圏の人にはむずかしい。自分の背負っている環境とか社会のいろんな問題がからみあって、口では言えない苦勞がたくさんあります。アフターケアについては、日本の上から下まで、日本政府、文部省、外務省、大学、企業、全ての留学生関係者、あるいはそれぞれの専門家の学会などが、留学生の帰国後連携をとる。要するに英米みたいに、医学を英国で教わって帰ってくれば後ろに尻尾みたいに英国の医学関係者のフォローがついてくる。医学の最新の情報も絶えず送られてくる。そのようなアフターケアサービスをできる体制を日本も早急につくる必要があると思ひます。

それからまた横縦の問題もあります。欧米の留学生達を見ても、私は仲間が多いんですけど、例えばある有名大学の卒業生たちは、世界的なマフィアみたいなネットワークをもっている。あるアメリカの大学を卒業すると、まず企業の中に重用される。例えば会社の名前は言えないんだけど、アメリカの超一流企業のNO.3はシンガポリアンです。ニューヨークの本部の3番目のポジションに就いています。

それでこの人がもし何かで日本に行くとすると、東京には自分の先輩か後輩がいますから、電話一本で全部やってくれるんですよ。そのような横の連携が日本留学生にも必要では無いかと思ひます。

最後に、私は日本に来まして日本の皆さん、社会、明治維新の、あるいは日本人の人間関係などを勉強させていただきまして、大学時代に、また大学に入る前の日本語の先生、大学に入って日本の学生さんと一緒に同じ教室、同じ研究室、同じゼミで日本の税金を共同で使わせていただいて勉強することができ、私は幸せでした。ありがとうございました。

(注) 7つの国歌とは、① God Save The King (King George The VIは1952年2月6日に崩御。植民地時代に当地の全ての学校で教えられた。全ての映画館で放映の直前と直後に全員起立、God Save The Kingを歌う) ② 君が代 (太平洋戦争で日本軍が3年8ヶ月占領。その間、全ての学校で教えられた。私は当時まだ小さかったので、自宅近くの軍人クラブから流れてきた「君が代」のMelodyをよく耳にした記憶がある) ③ 三民主義 (終戦後、小学校に入った時、旧中華民国の国歌。植民地だったが、Overseas Chineseの自己費用で作った中国語の小・中学校と高校で中国本土の国歌が許された。その時の国歌は国民党の「三民主義」だったが、今でもよく覚えている) ④ 義勇軍行進曲 (聶耳作曲、今の中国国歌、1949年10月以降。1949年10月1日、中華人民共和国が成立、「三民主義」は歌われなくなり、暫くして「義勇軍行進曲」が入ってきた。) ⑤ God Save The Queen (Elizabeth女王が1952年2月に戴冠。Queen Elizabethが即位した時 God Save The Queenに変えられた) ⑥ Negara Ku (マレーシア国歌、シンガポールは1963年9月16日にマレーシアに加入) ⑦ Majulah Singapura (シンガポール国歌、1965年8月9日、マレーシアから分離)

石井：ありがとうございました。今日のシンポジウムをくくるにふさわしいようなお話をさせていただいて大変ありがとうございました。あの、どうも我々は知っているようでいふ

ん知らないことがあるとつくづく思います。例えば今日本から東南アジア、アジア諸国にずいぶんたくさんの旅行者、ツーリストが行ってますね。しかし、例えば日本人がシンガポールに行ったら、シンガポールのことがわかるか、シンガポールに行ったらレイビトンのバックが安いから買ってくるということならばありますけど、そこでシンガポールの人と触れ合うということはなかなか無いんですね。

私はどうも日本人というのは外に出ると、ちょうど宇宙服を着て宇宙空間に行くように、カプセルの中に入って動いているという感じがしてしょうがないんですね。

私自身、今から30年位前に、タイから帰ってから今度はイギリスに行ったんですけど、その時でもですね、イギリス人と付き合っている日本人は実に少ない。驚くほど少ない。驚いたことはですね、私、なるべく日本人とは付き合わないようにしてたんですけど、ある時パブへ行ったら日本人らしき人がやってきて、東京のある大学の先生でしたけど、あなた日本人ですかというから、まずいなと思ったけど、ああそうですと言ったらですね、日本はいいですねイギリスより言うから、なぜですかと聞いたら英語が出来ない時日本なら誰でも教えてくれたけどここでは誰も教えてくれないと。つまりイギリスに行ってイギリス人と話しをしようとしな。で、一生懸命勉強している。

だから私ロンドン大学にいる時ですね、「ヨネオ、またミスターゼロックスが1人来たよ」という言い方をされる。どういう意味かという、大英図書館に行って本を読んで、こんなにたくさんゼロックスをもってみんな日本人は帰って行くと。だけどその間全然英国人の友達は作らない。私はそれはヨーロッパだけじゃなくて東南アジアでも世界中そういう

ところがあるんですね。日本人というのは国際交流という言葉が大好きでして、「国際交流」という雑誌の編集委員をやったことがあるんですけども、国際交流というのは本当の意味で日本には無いんです。あるのは2つの直流なんです。日本を紹介する。で、向こうのものを学ぶ。それだけの話でその間に接触がないんですね。

今日のシンポジウムの一番大きな大事なポイントはその意味での交流をしよう。つまり人間を媒介にして二つの文化が触れあう問題点を分かりあう。その意味でよく日本人にはビルマ、今はミャンマーといいますが、ビルマめろめろという人がいる。ビルマが好きで好きでしょうがない。これは本当にビルマにとっていいことかという、私は必ずしもよくないと思います。日本めろめろというのも困るんです。さっき一番最後にウォンさんがおっしゃったように功罪がある。で、何が功で何が罪なのかということをはっきり見極めた上でですね、しかもそれを解決できるのは人間関係だけなんですね。

その意味でみなさんが穂積先生のことをおっしゃったことを私たちはものすごく大事だと思う。少なくとも10人、100人とは言わなくても10人の穂積先生が欲しいんですね。だからぜひ皆さんは、なぜここで10の方が穂積先生とおっしゃったかということの意味を考えていただきたいと思うんです。

私は今日穂積先生の宣伝をするために来たわけじゃないんですが、皆さんが二言目には必ずおっしゃるというのは、それは日本にとってもものすごく大きな財産なんですね。だから我々は今後留学生が100万人になるか1000万人になるか知りませんが、そのことを喜ぶ必要は毛頭ないんで、やはり10人の留学生が日本を理解し、日本のいいところ悪いところ

ろをわかってくれて、しかも今のウォンさんのお話があったように、マイナス・マイナス・マイナスにも関わらず日本に来てくださって、そして日本を理解し、活躍をしておられるという、そういう状況が私ものすごく大事だというふうに思います。

そんな意味で、このシンポジウムで今日、私が「日本留学を帰国後どう生かしたか」ということにテーマを絞ったわけですが、生かし方はいろいろたくさんある。具体的に最高度の心臓手術の技術を生かすというのもそうでしょう。それから日本で日本文学を勉強した人がフィリピンに帰って、フィリピンに昔文化がなかったというのはおかしいじゃないかということで、田舎に住み着いて、そこで口承の文学を学ばれて、14冊の本を書かれたという、これもものすごく大きなプラス。それから大学を造られたということも素晴らしいことだと思いますね。それから今、ウォンさんのように本当の意味で日本に留学したことを生かしていただいている。功罪の罪のほうも背負いながら、プラス・マイナスでは若干でもプラスが多ければ、私はそれなりの意味があったというふうに思うわけです。

まとめとして

石井：さきほど紹介を忘れましたけど、チャンマーのアウンチョウさんは実は私はいろんなことで関係しているんです。それぞれの東南アジアの国にですね、日本留学生会があるわけですね。アスコジャ (ASCOJA) というのがあって、それをまとめてアスジャ (ASJA) というのが今度は、留学生会のさらに上部団体みたいなもので、私もメンバーでスポンさんんですけど、つまり先ほどからネットワー



クのことを言っているんですが、私はその意味でアスジャとかアスコジャということが非常に大事だということなんです。で、これはですね、今度総理になられた福田康夫先生が非常にサポートされてまして、福田先生はですね、アスジャ、アスコジャの会があると必ず出てこられて、こないだもインドネシア行かれたんですね。そういう意味で日本の政治家の中にも重要性がわかってきている人がいるわけですけど、それを東南アジアの側で支えている重要人物の1人がアウンチョウさんなんですね。こういう意味で人間関係を作っていくということは非常に大事ですので、今日のこのシンポジウムをきっかけにして、我々もみなさんの周囲におられる留学生の方と本当の意味での交流をしていただいて、お互いに理解しあい、お互いの功罪というものを認めた上で共存していく道を探りたいと思います。どうもありがとうございました。

工藤：石井先生、そしてスピーカーの皆さま、本当にありがとうございました。また本当にありがとうございました。時間も予定通り終わることができまして、皆さまのご協力に感謝致します。ところでちょっとお願いがございます。今日のシンポジウムは、文京区との共催で行わせていただきましたが、アジア学生文化協会としては50周年を記念するというところで取り

組んだものです。ただし、これは単に過去の50年の成果を確認するというだけじゃなくて、むしろ、これを踏み台にして次の50年を切り開く、そういうものにしたという願いがあってのことです。そういう意味では、もし今日のお話を皆さまが感心を持っていただけたとすれば、アジア文化会館とともに次の50年を開く仲間になっていただきたいのです。会員制度もごございますし、またいろいろな形でつながるコースももっておりますので、どうかみなさんよろしくお願い致します。

それからみなさん、受付のところでお渡しいただけたと思いますが、アンケートの調査をお願いしております。先ほど会場から日本語のことをお褒め戴きましたけど、実は、スピーカーの方がたの中には何十年ぶりに日本へいらっしゃる方もあり、その間全然日本語を使わないで過した方、例えばフィリピンのアレグレさんのようなですね、片田舎に行ってフィリピンの文化を掘り起こすという仕事をしていますから、日本語はほとんど使わないわけなんですね。そういう方にも来ていただいてお話いただきましたから、果たしてスピーカーの日本語がみなさんに通じたのか心配もあります。そういうこともアンケートの中にうかがうようになっています。今後の改善のために役立たせたいと思いますのでアンケート調査にも、ぜひご協力いただきたいと思います。

それから先ほどもお願いしましたが、最後に石井先生も触れておいででしたけど、このアジア文化会館を創設した穂積五一という人物がはたしてどんな人物であったのかということをご理解戴くために、今年本を出版しましたので、ぜひご購入してお読みいただけますようにご協力いただきたいと思います。

本日は本当にありがとうございました。

<終>

当初シンポジウムのスピーカーとしてご出席予定でしたがご都合により来日不能となった魏慶鼎氏の報告予定稿

「私は日本で何を学んだか」

魏慶鼎(中国)

北京大学工学院教授、工学博士(東京大学)



1. 私は日本で何を学んだか

1979年4月、私は中国政府によって派遣された一番最初の留学生のうちの一人として(日本の)東京大学に留学しました。留学生といっても多くは40歳を過ぎている大学教授と研究員でした。私は東京大学宇宙航空研究所の佐藤先生のゼミで乱流実験研究という分野の研究をしていました。二年間で主に学んだことは以下の通りです。

1) 現代実験流体力学方面の技術、特に乱流実験の知識

先進的な乱流実験技術、例えば、熱線風速計、スモークワイヤ、高速撮影、マイコン制作、データの収集と処理などの技術を習得しました。また、乱流境界層剥離の微細構造というテーマで1981年12月、東京大学工学部の博士課程学位を取得しました。1982年2月、北京大学に戻った当時、私も乱流実験研究の分野でもっとも経験を持っている人でした。日本に留学する前は、私は乱流実験研究の分

野にはまったく無知でしたが、留学で得た当分野の知識のおかげで、1990年に国が重要な研究施設と指定した乱流研究の国の重点実験室設立に加わり、10年の間、研究室主任として務めました。

2) 実験研究の精神—手作りの研究用機械

来日する前は、乱流実験の先進的な機械、例えば熱線風速計などは聞いたことがありましたが、しかしそれはほとんど外国から輸入された高価な機械でした。ところが、東京大学宇宙航空研究所の佐藤先生のゼミの皆さんが使っていた機械は、なんと自分たちで作った熱線風速計やモニターを通して人と機械がコミュニケーションできるコンピュータなどでした。私は、それを見てとても驚きました。それ以来、私の研究に必要な機械は、先生や研究室の院生達に支えていただきながら、ほとんど自分で作りました。研究者たる者は、自分が必要な機械を自分で開発する力を持つことが重要なポイントだと感じさせられました。当時我々が開発したそれらの機械は、現在市場には見当たりませんが、もしあったとしても、非常に高価なものであると思います。

3) 人としての高尚な精神

謙虚、探究心、尊敬の念、人を助ける精神、公德心、規律遵守、勤勉、責任感など、これらは研究室の先生や同僚たち、ABKの理事長穂積五一先生とご家族、ABKの職員、さらに日本の社会から学びました。こうした精神は学術面でも重要かつ意義があるものです。

2. 日本留学と欧米への留学の比較

学術上から見ると、日本の科学技術は世界で一流です。もちろん、科学技術分野に優れている他の国にも特長があります。例えばア

メリカの宇宙飛行、原子エネルギー、生物医学などは非常に優れ、巨大な創造力と潜在力があります。またイギリスは基礎的な科学技術と特定の先端技術を持っています。またドイツは民間用の科技技術の開発に優れています。日本はドイツと似て、一般家庭用の電気機器、自動車、カメラ、時計などの技術は世界中でトップです。また造船、製錬などでも高い技術を持ち、物理や化学など基礎研究分野でもノーベル賞を受賞しています。日本の実力の高さはそうした事例から証明できます。私の専門である流体力学、空気動力の領域でも日本は高い技術を持っています。例えば、流れ可視化研究では日本は世界のトップです。これらのことから、日本への留学は欧米には負けていません。ただ言語の面から見ると、日本語は英語ほど国際的な言語ではないので、少し不便を感じます。しかし当然それは解決できるものです。

3. 帰国後の活躍

1) 国内の乱流実験研究の重要人物になりました。

2) 日中学术交流に積極的に尽力しました。北京大学を訪問する日本の学者の方々のご案内、頻繁な日本の学術会議への参加、中日可視化会議の創設への参加(創設後は、アジア可視化国際会議にかわる)、さらには日本の学者と共同で曲水の宴を研究し、日本の国際的な雑誌 <Journal of Visualization> の編集者になり、日本可視化学会名誉会員にもなりました。

<終>